

第十一條 生徒修業上需用ノ器械物品ハ總テ官給トシ且手當金若干ヲ給ス

第十二條 生徒中別々テ一級二級ヲ置ク其二級ヨリ一級ニ進ムハ學術進步ノ景況ニ依リ伸縮スルヲアルヘシト雖モ概テ六ヶ月ニシテ試験ヲナシ其試科ニ應スル者ヲ以テ昇級セシメ尙學ヲ一六ヶ月ニシテ大試験ヲナシ卒業及第スル者ハ之ヲ軍用電信三等技手ニ任ス

第十三條 軍用電信技手服役期限ハ三等技手ニ任スルノ日ヨリ七少年トス猶再役ヲ願フ者アレハ之ヲ許スヲアル可シ

第十四條 技手並ニ建築卒ノ服役已ニ其期限ニ滿ルト雖モ戰時若シハ非常戒嚴等ノ時ハ之ヲ延期スルヲアルヘシ

第十五條 技手並ニ生徒及ヒ建築卒ハ總テ私宿ニ在テ日々

通勤スルヲ例トス其出勤退出ノ時限ハ時々之ヲ定ムヘシ但建築卒生兵中ト雖モ亦本條ニ準ス

第十六條 生兵又ハ生徒中ハ定例ノ外休暇歸省ヲ許サス

第十七條 服役期限中ハ勿論生徒並ニ生兵中自己ノ望ニ由リ免除ヲ願フヲ許サス然レモ病患ニテ服役ニ堪ヘ難キ者又ハ成業ノ目途ナキ者ハ檢査ノ上之ヲ免除ス

第十八條 軍用電信技手ハ工部電信局ニ托シ通信ニ從事セシムルヲアルヘシ

第十九條 建築卒志願ノ者檢査ノ項目左ノ如ク

其一 年齢 自十八年至二十四年

其二 身長 五尺以上

其三 體質 強壯ノ者

其四 作文 通常書翰往復ヲナシ得ル者

其五 讀書 眞假名交リノ文ヲ讀ミ得ル者

第二十條 軍用電信技手生徒志願ノ者検査ノ項目左ノ如

其一 年齢 自十五年至二十年

其二 體質 強壯ノ者

其三 作文 書翰往復ヲ能クナル者

其四 讀書 眞假名交リ文ノ誦讀ヲ能クシ、並ニ西洋書

ヲ讀ミ得ル者

其五 數學 加減乗除ヲ能クスル者

第二十一條 第十九條其三第二十條其二ハ醫官之ヲ檢シ其

他ハ總テ検査官之ヲ檢ス

第二十二條 建築卒及ヒ軍用電信技手生徒志願ノ者ハ二人

(東京居住ノ者ニ限ル)ノ身元引受人ヲ以テ左式ノ願書ヲ差出ス

願書式

建築卒入隊(軍用電信技手生徒修業)願

使(府)(縣)(平民)(職業)

戸主名何男(兄)(弟)(伯)(叔)(甥)(附籍)

姓 名

何國何郡(區)何所産
何國何郡(區)何町(村)何番地住(寄留)

年齢 當何月
何年何ヶ月

右之者此度建築卒入隊(軍用電信技手生徒修業)奉願候間御
検査ノ上御採用被下度入隊(學)ノ上ハ御規則嚴重ニ爲相守
可申且又當人身上ニ於テハ何事ニ依ラズ私共引請可申依
テ此段奉願候以上

身元引受人

使(府)(縣)(何族)(平民)

東京府下何郡(區)何町(村)何番地住(寄留)

姓名印

全

年號月日

全

軍用電信隊提理

官姓名殿

前書之通相違無之候也

使(府)(縣)長官(知事)(令)姓名印

第二十三條 華士族及ヒ平民中志願ノ者檢査合格ノ上ハ軍

人又ハ軍屬トナルヘキヲ以テ入隊(學)ノ時左ノ如ク誓文牒

ニ署名捺印シ其志操ノ確實ヲ証セシム

誓文

今般陸軍建築卒(軍用電信技手生徒)志願御許容相成候ニ付

テハ自今御規則嚴重ニ相守誓テ陸軍ニ從事可仕且卒業ノ
上御定則ノ服役年限ノ假令ヒ病氣ト雖ヒ陸軍醫官ノ診斷
ニ依ラズ免役ヲ請願致シ候等之儀ハ毛頭仕間敷候依テ誓
文如件

年號月日

姓名印

全

全

平時軍用電信隊編制表

官等	本部	總員計	第一電信隊					第二電信隊				
	人員馬匹	人員馬匹	本部	一小隊	總員計	本部	一小隊	總員計	本部	一小隊	總員計	
參謀中佐	一	一	人員馬匹	人員馬匹	人員馬匹	人員馬匹	人員馬匹	人員馬匹	人員馬匹	人員馬匹		
提理	一	一										
乘馬	一	一										

二等建築卒	一等建築卒	三等技手	二等技手	一等技手	伍長	軍曹		少尉	中尉	大尉	少佐
						曹長	軍曹				
						書記					副提
											理一乘馬
七十			八十				三十		十四		三
									七		三
						書記					隊長乘馬
十建築手			十通信手			二長	三通信所	一建築長	技監一	一小隊長乘馬	
五十			五十				二十		五	十五	一隊長乘馬
						書記					一隊長乘馬
十建築手			十五通信手			二長	三通信所	一建築長	技監一	一小隊長乘馬	
二十			三十				九		二	四	一

參謀中佐	官等		戰時軍用電信隊編制表	備考	合計	軍吏副	軍吏補	
	本部	總員計						
一提理乘馬	人員四	馬匹	第一電信隊	○將校下士ハ各兵科ヲ混用ス	四	一計官		
一一	人員四	馬匹				二〇七	一	
	人員四	馬匹	一小隊			二		
	人員八	馬匹	總員計			二		
	人員五	馬匹	一小隊			二		
	人員五	馬匹	總員計			二		
	人員四	馬匹	一小隊			二		
	人員八	馬匹	總員計			二		
	人員四	馬匹	一小隊			二		
	人員二	馬匹	總員計			二		

少佐	副提理	三	三	隊長乘馬	小隊長	乘馬	一	隊長乘馬	小隊長乘馬	四	二	一
大尉	理一				技監一	一	十五					
中尉	輸送長	十五	七		技監一		十五					
曹長	書記				技監一							
軍曹	書記				技監一							
伍長	書記	九	五	二	技監一							
一等技手					技監一							
二等技手			八		技監一							
三等技手					技監一							
一等建築卒		百			技監一							
二等建築卒		十			技監一							

一等卒					傳令步兵	兵九	六十		傳令步兵	兵十五	四十	
二等卒					傳令騎兵	兵三	五十		傳令騎兵	兵六	二十	
軍吏副	一											
軍吏補	計官											
合計	六	三	七	卅八	五	一	四	四	五	一	七	百七
		二	七	卅七		卅	卅	卅		六	卅	卅

○將校下士ハ各兵科ヲ混用ス
 ○表面人員外ニ電信器械工一名ヲ雇役ス
 ○建築卒ノ増員ハ後備軍ヲ以テシ其不足ハ他ヨリ雇役ス

○第拾五款 軍人軍屬操替金廢ス

○乙第八拾七號 八月十四日
 八月十七日

軍人軍屬處刑濟飯隊ノ者操替金ノ義ニ付別紙ノ通陸軍省

區役場所
 戶長

リ被達候就テハ本年乙第六十九號達相廣候條自今不及操替候條此旨相達候事

(別紙)達甲第十六号

府 縣

明治九年達第百六十七號達書自今相廢軍人軍屬處刑濟師隊ノ者旅次証書別紙ノ通改正候條此旨相達候事

明治十四年七月廿三日

陸軍卿大 山 巖

(別紙雛形)

(近衛鎮台)何聯隊何大隊何中隊

(下士兵卒) 姓 名

右ノ者今般處刑濟師隊申付某地ヨリ某鎮迄何十里一日拾里詰旅費日當金四拾錢合金何圓何拾錢相渡候條本日當地出立順路ヲ經歸隊ノ上ハ早々隊長へ此証書ヲ差出スヘシ若シ途中ニ於テ病氣事故ヨリ無據滯留シ旅費不足ニ及フモ一

切追給セサレニ付此旨可相心得者也

年 月 日

○第十六款 陸軍蹄鉄工生徒概則

○甲第五號十三年一月十六日

陸軍蹄鉄工生徒概則別冊ノ通被相定候條此旨布達候事

(別冊)

明治十三年(一月)甲第五号附屬

陸軍蹄鉄工生徒概則

陸軍帝鐵工生徒概則

第一條 蹄鉄工生徒ハ蹄鉄工ニ要用ナシ學術ヲ教授シ卒業ノ上蹄鉄工トナシ騎砲工輜重兵ノ諸隊并ニ調馬廐等ニ分

屬シ其職務ヲ奉セシムル者ナリ

第二條 締鉄工生徒ハ華士族平民并ニ鎮壓ノ兵卒中志願ノ者ニシテ檢査定格ニ合スル者ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 生徒修業ノ期ハ概テ滿二ケ年トシ卒業ノ者ニハ其證狀ヲ附與シ隨隊并ニ諸廠ニ於テ欠員アル毎ニ始メテ二等締鉄工ヲ命ジ之ニ分屬セシムル者トス

第四條 凡帝鉄工服役期限ハ二等帝鉄工ヲ命スル日ヨリ十ケ年トシ前七ケ年ハ現役ニ服セシメ後三ケ年ハ後備役ニ服セシム

第五條 現役滿期ニ至リ再役セシムル者ハ隨願スル者ハ詮議ノ上更ニ三ケ年ノ役ニ服スルヲ許シ後備役ヲ免ス

第六條 帝鉄工中學術ニ長シ才能拔群ナル者ハ下士ニ任ス而シテ其服役年限ハ前役ト通算シテ十ケ年トシ後備役ヲ

免ス

第七條 服役己ニ其期限ニ滿ルト雖モ戰時若シハ非常戒嚴實地演習等ノ時ハ之ヲ延期スルコトアルヘシ

第八條 生徒中別チ第一級二級ヲ置ク其二級ヨリ一級ニ進ムハ學術進歩ノ景況ニ依リ伸縮スルコトアルヘシト雖モ概テ十二ケ月以上修業セシ者ニ非レハ昇級セシメサルヲ例トス

第九條 生徒授業ノ科目ハ締鉄工生徒教則表ニ掲載スル所ノ如シ

第十條 生徒中ハ被服食料及ヒ諸器械等總テ官費トシ且手當金若干ヲ給ス

第十一條 生徒中ハ定例日ノ外一切休暇節省ヲ許サス

第十二條 生徒中ハ退舍ヲ許サス然レモ卒業ノ目途ナキ者

又ハ病患ニテ其業ニ堪ヘ難キ者ハ検査ノ上退合セラルヘシ

但兵卒ヨリ入合セシ者卒業ノ目途ナキハ舊隊ニ復歸セシム而シテ入合年限ヲ通算シ常備服役ヲ終ル者ハ直ニ豫備軍ニ入ラシムヘシ

第十三條 脩業中行狀不正ニシテ罰料多キ者ハ脩業ヲ差止メ更ニ三ヶ年間軍馬局ノ小使等ニ使役スルコトアルヘシ

第十四條 蹄鉄工生徒志願ノ者検査ノ項目左ノ如シ

- 其一 年齢 自十八年至二十五年
- 其二 身長 四尺九寸(曲尺)以上
- 其三 體質 強壯ノ者
- 其四 作文 通常書翰往復ヲナシ得ル者
- 其五 讀書 眞假名交リノ文ヲ讀ミ得ル者

其六 數學 加減乗除ヲナシ得ル者

第十五條 前條其一其二其四其五及其六ハ検査官之ヲ檢シ

其三ハ擧官之ヲ檢シ合格ノ者ハ更ニ一週間通學セシメ實試ノ上入合スルヲ許ス

第十六條 入合志願ノ者ハ二人(東京居住ノ者ニ限ル)ノ身元引請人ヲ以テ左式ノ願書ヲ陸軍々馬局ニ差出スヘシ

華士族平民願書式

蹄鉄工生徒入合願

使(府)(縣)(何族)(平民)(職業)

戶主名何男(兄)(弟)(伯)(叔)(甥)(附籍)

何國何郡何所産

何國何郡何町(村)何番地住(寄留)

姓名

年齡 當何月 何年何ヶ月

右之者此度蹄鉄工脩業奉願候間御検査ノ上御採用被下度

入舎ノ上ハ御規則嚴重ニ爲相守可申且又當人身上ニ於テ
ハ何事ニ依ラズ私共引受可申依テ此段奉願候以上

身元引受人

使(府)(縣)(何族)(平民)

東京府下何郡(區)(何町)(村)(何番地住(寄留)

姓名印

全

年號月日

全

陸軍々馬局長

官姓名殿

前書之通相違無之候也

使(府)(縣)(長官知事令姓名印

兵卒願書式

帝鉄工生徒入舎願

等級

姓名

全

全

何年何ヶ月

合何人

全

右當隊兵卒締鉄工脩業志願者ニ付名簿寫相添ニ差出候間
御検査ノ上入舎御差許相成度候也

所管兵種隊隊長

年號月日

官姓名印

軍馬局長

官姓名殿

第十七條 華士族平民中志願ノ者検査合格ノ上ハ入舎シテ

軍人トナリ送ニハ下士ノ任ヲモ蒙ルヘキヲ以テ入舎ノ時
左ノ如ク誓文牒ニ署名捺印シ其志操ノ確實ヲ証セシム
誓文

今般陸軍帝鐵工生徒入舎御許容相成候ニ付テハ自今御規
則嚴重ニ相守誓テ陸軍ニ從事可仕且卒業ノ上御定則ノ服
役年間ハ假令ヒ病氣ト雖ヒ陸軍醫官ノ診斷ニ依テ免役
ヲ請願致シ候等ノ儀ハ毛頭仕間敷候依テ誓文如件
年號月日
全 全 姓 名 印

帝鐵工生徒教則表

本	二ヶ月	四ヶ月	六ヶ月	六ヶ月	三ヶ月	三ヶ月
鍛冶	鐵造	鐵裝	蹄造	釘造	剔	毛

科	補	科	
		蹄	算
撰	鐵	各種造蹄鐵	尋常裝蹄
鍛	鍊	各種裝蹄	各種造釘
			各種剔毛髮
騎兵	操練	學術	
徒步	乘馬	算	
豫行運動	豫行運動	加減乘除	小數四則
生兵運動	生兵運動	分數比例	

備考
補科ハ本科ノ余暇ヲ以テ演習セシメ概テ本科ト共ニ卒業セシム可シ補科操練中
銃器ノ使用技藝ヲナサンメ
表中科目卒業期月ヲ示スト雖ヒ進歩ノ遲速ニ從ヒ之ヲ伸縮スルコアルヘシ

帝鐵工生徒入舎卒業并服役期限概表

年次	入	舎	卒業	服役	免役
初年	一月	七月			
二年	一月	七月			

三年	一月	七月	一月	七月	一月	七月	一月	七月
四年	一月	七月	一月	七月	一月	七月	一月	七月
五年	一月	七月	一月	七月	一月	七月	一月	七月
六年	一月	七月	一月	七月	一月	七月	一月	七月
七年	一月	七月	一月	七月	一月	七月	一月	七月
八年	一月	七月	一月	七月	一月	七月	一月	七月
九年	一月	七月	一月	七月	一月	七月	一月	七月
十年	一月	七月	一月	七月	一月	七月	一月	七月

○第十七款 陸軍恩給令

○乙第二百九拾壹號

十一年七月十三日

各區々戸長

昨十年鹿兒島賊徒征討ノ際從軍戰死セシ軍人ノ寡婦孤兒等別冊陸軍恩給令條款ニ掲載ノ手續ヲ以乘テ相達置候恩給令

三十一日七月
百九拾七號
文中同令
取計ノ可
第九拾四
ノ有之
三付ノ
字ヲ割
メ

總則

陸軍恩給令



書式ニ準シ早々扶助願出候様可取計此旨相達候事
但戰死ノ本人寡婦孤兒無之モノ并陸軍省山仕ノ文官ニシ
テ恩給令附録ニ適當スルモノ其他ノ軍人出征中傳染病ニ
罹リ或ハ公務ノ故ヲ以テ死亡スル者ノ寡婦孤兒同令ニ據
リ扶助ヲ可願者モ同様可取計遲延ナシ願書差出候様可致
候事

第一條 陸軍恩給ハ軍人奉仕中諸種ノ功勞ニ依テ獲ル者ニ

シテ其種類ヲ別ツテ左ノ如シ

第一 恩給 服役停年ト傷疾疾病トニ由ル者ナリ

兵庫縣布達便覽上卷兵務之部

其給額ハ服役ノ長短傷疾疾病ノ輕重其軍人ノ官階並ニ
在職中ノ停年ニ從テ各差等アリ

第二 寡婦扶助料 其給額亦其夫ノ官階ト死没ノ緣故ト
ニ由テ差アリ

第三 孤兒扶助料 其給額上ニ同シク差アリ

第四 罷役後恩給 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫
軍樂各部右同等ノ輩服役十五年以上ノ者ニ給スル所ニ
シテ其給額服役停年ノ長短ニ準ス

以上四種ノ恩給並ニ扶助料ハ大藏省ヨリ別途ニ支給ス
ル者ナリ

第五 罷役俸 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂
各部右同等ノ輩服役十一年ヨリ十五年未滿ニテ罷役ニ
入ル者ニ給スル所ナリ

第六 罷役恤金 恩典トシテ壹號休暇ヲ賜ヒ歸郷セシメ
タル下士兵卒並ニ同等ノ輩ニ給スル所ナリ

以上二種ノ給料ハ陸軍ノ各年定額表ニ載セテ陸軍省ニ
リ支給スル所ニシテ罷役俸並ニ罷役恤金令アリ後ニ附
ス

第二條 恩給、寡婦扶助料、罷役後恩給、ノ三種ハ其本人ニ生涯
之ヲ給スヘシ

孤兒扶助料ハ其孤兒男女共ニ二十歳ニ至レハ之ヲ止ム
罷役俸ハ其上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部
右同等ノ輩服役停年ノ半期ニ準シテ(タトヘハ服役停年十二年ナレ
ハ其半期即チ六年トス)其年間之ヲ給シ罷役恤金ハ二ケ年ヲ以テ
限リトス然レモ之ヲ更新スルコトヲ得ヘシ

第三條 凡ソ此各種ノ支給料ハ當該人名存生ノ中ハ之ヲ支

十一月十一日
第九百七拾六
號第一項
（普通改正）
ノ四字別

恩給

給シテ停止スルコトナシ但シ公借隊内借財並ニ身代限ニ處
ヒシルモ時モ其引シ所給額五分ノ一ニ過ルヲ得ス

第四條 凡ソ陸軍恩給ヲ受ルノ權ハ次ノ事故アレハ之ヲ止
メ或ハ其時間之ヲ停ム

第一 破廉耻甚ノ者或ハ懲役實決以上ノ處罰ヲ受ル時

第二 事故アリ日本人タルノ分限ヲ失フ者

第三 政府ノ許可ナシテ帝國外へ出ル者

第五條 恩給停年ニ基ツク者ハ最下限ヨリ最上限マテノ差
等アリ最上限ニ越ルコトハ此後第十一條第一節及ヒ第七十
八條ニ揭示スル者ニ係ルノ外絶テ有ルコトナシ

第六條 最下限ヲ受ルノ權ハ上長官士官準士官並ニ會計軍
醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役實期廿五年ニ滿ル者之ヲ
獲ヘシ又上長官士官準士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右

同等ノ輩服役實期二十年ニ滿ルノ後一時ノ疾病ニ由リ三
年以上非職タリシ者查問會議ニ因テ再ヒ現役ニ復ス可ク
ナル者ナリト處決スル時ハ其官階ニ準スル最下限ノ恩給
ヲ受ルノ權利ヲ有ス但シ從軍年ヲ算入スルノ恩典ナシ

下士兵卒服役實期十五年ニ滿ル者ハ最下限ノ恩給ヲ受ル
ノ權利ヲ有ス

第七條 恩給ノ最上限ハ服役四十五年ニ滿ルノ上長官士官
準士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩三十五年ニ
滿ルノ下士兵卒並ニ同等ノ輩之ヲ受ルノ權利ヲ有ス

此故ニ上長官士官準士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同
等ノ輩ハ滿二十五年以上下士兵卒並ニ同等ノ輩ハ滿十五
年以上毎年最下限ヨリ最上限ニ至ル差二十分一ノ比例ヲ
以テ其受ル所ノ給額ヲ增加ス但シ此年數ニ從軍年ヲ算入

傷病
總目

スルハ後ノ第四十二條ニ揭示スルカ如シ

第八條 戰地若シハ公務中偶然ノ事故ニ由テ重傷ヲ受ケ不
治ニ至ル者ハ恩給ヲ受ルノ權利ヲ有セシム

重病ノ人陸軍服役ノ疲勞危難ヨリシテ發シ不治ナリト認
メラル、者亦同シク此權利ヲ有セシム

第九條 其傷痕疾病或ハ盲目トナリ或ハ切斷ニ由リ又ハ其
傷病ニ由リテ全ク一肢以上ノ用ヲ失フ者ニハ直ニ恩給ヲ
受クルノ權ヲ有セシム然レモ其傷痕疾病右ノ重症ニ比シ
テ一層輕キ者ハ次ノ事情アルニ至ラサレハ之ヲ有セシム
ルコトナシ

第一 上長官士官準士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同
等ノ輩ハ其傷病ニ因テ現役ニ堪ヘサル者年ヲ經ルト雖
モ竟ニ復役スルニキ目途ナキ時

部類
定目

第二 下士兵卒並ニ同等ノ輩ハ其傷病ニ因テ服役スルカ
ラスシテ糊口ヲナスコト能ハサル時

第十條 上條ノ道理ニ基ツキ凡テ服役ノ事ニ關カラサル純
傷其他體質薄弱若シハ老衰若シハ世上一般ノ疾病ニ罹
者ハ此限ニアラス

第十一條 恩給ヲ給スルノ本則ハ其由ヲ以テ此ニ至ラシム
ルノ源因ノ輕重ニ準シテ差等アルコト次ノ如シ

第一 其兩眼ヲ盲シテ不治ニ至ルト並ニ切斷ニ由テ二肢
ヲ亡スト此ニツキ懼ル軍人ハ何ノ官階ヲ論セス停年恩
給ノ最上限ノ上ニ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫
軍樂各部右同等ノ輩ハ其給額百分ノ二十下士兵卒並ニ
同等ノ輩ハ百分ノ三十ノ増額ヲ受ク但シ其服役ノ長短
ヲ論スルコトナシ

第二 一肢ヲ切斷シ若クハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル軍
 入ハ何ノ官階ヲ論セテ唯最上限ノ額ヲ受ク但シ其服役
 ノ長短ヲ論スルコトナシ

第三 其傷痕疾病全ク一肢ノ用ヲ失フニ至リ若クハ之ヲ
 失フコトナキモ之ヲ失フニ等シト認ムル所ノ軍人ハ何
 ノ官階ヲ論セテ又其服役ノ長短ヲ問ハス先ツ停年恩給
 ノ最下限ヲ以テ之ニ當テ而シテ後ニ服役ノ年度ニ照シ
 恩給最下限ヨリ最上限ニ至ル差ノ二十分一ヲ加ヘタル
 給額ヲ受ルノ權アリトス然レモ其給額最上限ノ高ニ至
 レハ其上増加スルコトナシ但此服役年數ニ從軍年ヲ算
 入ス

第四 其傷痕疾病前項ニ比スレハ一層輕キモノコレヲ自
 己ノ用辨ニ差支ナキモノハ最下限ノ額ヲ一時限リ給ス

料兒寡
扶婦孤

但シ服役停年(從軍年ヲ算入ス)ニ由リ最下限ノ恩給ヲ受
 シルモノハ此一時限リハ給セスト雖モ其罷役後恩給或
 ハ罷役俸並ニ恤金ヲ受ルニ止マルモノハ別ニ此一時限
 リナモ給スヘシ

第十二條 其他後ノ第七十九條ニ揭示スル所ニ係ル者ハ給
 額ノ差數五分ノ一ヲ以テ之ニ増加スルコトヲ得ヘシ

第十三條 恩給ヲ受クヘキ夫ノ死後ニ於テ其夫ノ官階ニ屬
 セル停年恩給ノ最上限ノ半數ト定メ生涯之ヲ受ルノ權ヲ
 有スル寡婦ハ次ノ如シ

第一 戰地若クハ公務ニ於テ殺害ヲ受ケタル軍人ノ寡婦

第二 内地若クハ日本外ノ軍中ニ於テ或ハ戰爭ノ事故ニ
 由リ或ハ傳染疫癘ニ罹リ其他服役ノ義務ヲ奉スル爲ニ
 死没シタル軍人ノ寡婦

第三 戰地ニ於テスルト公務ニ於テスルトヲ論セス其傷

瘡ニ源因ニテ終ニ死ニ至ル軍人ノ寡婦

第十四條 恩給ヲ受クヘキ夫ノ死後ニ於テ其夫ノ官階ニ屬

セル停年恩給最上限ノ四分一ニ均シキ給額ヲ生涯受ルノ

權ヲ有スル寡婦ハ次ノ如シ

第一 其夫既ニ恩給ヲ受テ死シ後ニ遺レル寡婦

第二 其夫未タ之ヲ受ケスト雖モ受クヘキ權ヲ有シテ死

シ後ニ遺レル寡婦

總テ寡婦ハ陸軍卿ノ許可ヲ受ケ合式ノ婚配ヲ行ヒ其夫ノ

現役ヲ去ルノ前即チ陸軍俸給ヲ離ル、時ヨリ一ケ年以前

ニ嫁シタル者タルヘシ(但戰死或ハ傷痕ノ原因ニ由テ死ニ至ル軍人ノ寡婦

ハ嫁時ノ年月ニ關セス死傷前ニ婚配セルモノタルベシ)然レモ其夫致仕ノ

以前ニ前時ノ配偶若シハ此配偶ヨリ生レタル兒子アレハ

十一月九日第十一
加号四百七十六第
加號測計道

嫁時ノ年月ヲ查確スルコ及ハス

第十五條 寡婦其家ヲ去リ若シハ再婚スルトハ扶助料ヲ望

ムノ權ナシ此場合ニ於テハ兒子(本腹意腹ヲ分タス其戶籍ニ登記セル

モノ)アル者ハ之ヲ孤兒ト見做スヘシ

第十六條 其寡婦死去シ或ハ再婚等ノ事故アリテ其扶助料

ヲ受ルノ權消絶スルモハ其權其軍人ノ一子若シハ數子ノ

幼年ナル者アレハ其數ニ拘ラス是ニ轉移シ寡婦ノ受クヘ

キ扶助金ト均シク年々其扶助料ヲ受クルヲ得ヘシ

第十七條 此道理ニ基ツキ其軍人ノ死スル前ニ母ノ死シタ

ル孤兒ハ其母ノ受クヘキ扶助料ヲ直ニ受クヘシ

第十八條 凡ソ養子ハ其軍人生前ハ養子ニテ唯嗣子タル者

ニ限リ二十歳未満ナレハ之ヲ受クルノ權利ヲ有ス若シ其

女子ニ養子ヲナスト雖モ未婚中ナレハ第十六條ノ例ニ

全七達、
加ノ十字、
加ノ若ノ下、
其軍人生前
ニノ五字前

退職料
ヲ願フ
總則

準スヘシ但シ其養子ト婚配スレハ男女トモ其權消絶ス

第十九條 此扶助料ハ孤兒幼年ノ間ニ限ル者ニシテ男女共
ニ二十歳ニ至ルマテナ期トシ其期ニ達スレハ其權轉シテ
次子ニ移ル者トス

第二十條 服役停年ニ付テ退職ノ思給ヲ願フハ服役定期全
ク滿ツルノ前ニ非レハ之ヲ願フコトヲ得ス

第二十一條 此故ニ各軍隊ニ於テハ毎年一次ノ外ハ退職恩
給願ヲ軍人ニ許可セサルヲ以テ常則トス

其願書ハ總テ各年檢閱使定期檢閱ノ前一箇月ニ於テ証據
ニ供スヘキ書類ヲ副ヘ之ヲ本隊ノ會計會議ニ移呈スヘシ
此會議ニテ願人ノ申告ニタル事實ヲ查照シ其服役ノ明細
書並ニ願意ノ証據ニ供スヘキ書類ニ調印シ其是非ヲ當人
ニ説諭シ而シテ後ニ總テ此書類ヲ檢閱使ニ呈スヘシ

此例ニ外ナル者左ノ如シ

第一 其下士以下隊内ニ在ル者定期十五年ニ滿ルノ時ニ
入隊ノ納期モ盡ル者ニ就テハ此期限前ニ合式ノ願書ト
証據ニ供スヘキ書類トヲ併セテ入隊納期滿限ニ至ル日
ニ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈スヘシ此場合ニ於テハ該官
ハ檢閱使ノ任ヲ行フヘシ

第二 戰地ニ於ケル重傷重病ノ事故ニ基ツキタル思給ハ
總テ之ヲ急速ニ取扱フヘシ故ニ此場合ニ於テハ一團隊
ノ首帥檢閱使ノ任ヲ行フヘシ

第三 其他急速ヲ要スル場合ニ於テハ四季ノ閱兵ノ時ニ
鎮臺ノ司令將官自ラ檢閱使ノ任ヲ行ヒ或ハ部下ノ司令
官ヲシテ之ヲ代理セシムルコトアルヘシ

第二十二條 凡テ思給ノ進達文ハ其緣故ヲ開列シ服役並ニ

從軍ノ事實ヲ表章シテ願人ヲシテ恩給ヲ受領スルニ適當ナラシムルヲ以テ主トスヘシ

第二十三條 其軍人軍隊中ニ編制セラレタルハ其軍隊ノ會計會議ノ注意ヲ以テ其願書ヲ呈セシムヘシ

第二十四條 其進達文ノ外ニ次ノ書類ヲ悉ク取揃ヘ一纏トナシテ之ヲ呈スヘシ

第一 願人ノ縁故ヲ開列シタル願書 是ハ會計會議又ハ之ヲ所轄スル官廳等ノ長官ニテ署名調印ス

第二 身元履歷書 是ハ郷貫職業移住年月等ヲ詳カコシ且生年ヨリ陸軍出身マテノ履歷ヲ表シ兼テ父母妻子等ノ姓名ヲ載セタル者

第三 服役並ニ從軍ノ明細書 是ハ隊中ノ帳簿ヨリ凡テ該名ニ關係スル條款ヲ抄出シタル者但シ此書ニハ本人

調印スヘシ

第四 上包 是ハ會議又ハ此願書ヲ移轉スル官人ニテ作ル所ニシテ番號並ニ包中書類ノ番號ヲ表記シ願書並ニ附屬ノ諸書類ヲ之ニ包收シ仍ホ其遺脱ヲ防ク爲ニ絲帶ヲ施スヘシ

第二十五條 此書類ハ檢閱使若クハ四季ノ閱兵ヲナス將官ノ閱兵期日一箇月前ニ其管ノ司契ニ送付シ司契之ヲ合格ナリト認ムルハ檢印署名シ該臺ノ司令將官ニ呈シ將官一覽ノ上異議ナキニ於テハ直ニ會議ニ返送シテ其檢閱ヲナス將官ニ呈セシムヘシ

將官其人名ヲ檢査スルノ後會議ヲシテ恩給許可ヲ請フノ進達帖ヲ作ラシメ而シテ監督查照ヲ遂ケ將官之ヲ可トスルノ後其帖ト諸書類並ニ其願書ニ就テ自己ノ意見ヲ記シ

タルトヲ併セテ其包内ニ入レ之ヲ陸軍卿ニ呈スヘシ

第二十六條 其軍人或ハ隊中ニ在リ或ハ他ノ麻署等ニ屬シテ遠隔ノ地ニ在リ送達爲シ易カラサルハ鎮臺ノ司令將官ノ命ヲ以テ司契ヨリ其出ス所ノ願書ヲ近傍ニ駐劄スル兵隊ノ會計會議ニ送達シテ事ニ從ハシム

第二十七條 陸軍卿ハ其軍人服役ニ堪エサル者アレハ公命ニテ之ニ退職恩給ヲ願ハシムルコトアルヘシ

其願書送呈ノ法ハ前數條ニ舉ケタル所ニ異ナルコトナク又傷痍疾病ニ由ルモノハ後ノ第四十九條ニ舉ルカ如ク上長官士官並ニ會計軍醫馬醫各部右同等ノ輩ニ對シテハ陸軍卿ヨリ旨ヲ諭シ准士官以下ノ服役十五年ニ滿ナル者ハ其隊ノ長官其服役ニ堪エサルヲ認メタル時ハ其旨ヲ諭シテ退職ヲ願ハシムルコトヲ得然レモ其願書ハ猶其部ノ

檢閱使ノ手ヲ歷テ陸軍卿ニ呈スヘシ

第二十八條 其他軍人ハ一定ノ年齢ニ至タル時其退職恩給ヲ獲ルコトヲ就テ定メタル年限滿期ノ者ハ其服役ヲ辭シテ致仕スルヲ例トス其年齡定限ハ左ノ如シ

監督

軍醫監

藥劑監

六十

參謀大中佐 副監督 司契 軍吏正 軍醫正 藥劑正 馬醫監

五十七

大中佐 參謀少佐 監督補 司契副 軍吏 軍醫 劑官 馬醫

五十四

少佐 參謀大尉 軍吏副 軍醫副 劑官副 馬醫副

五十一

大尉 參謀中尉 軍吏補 軍醫補 劑官補 馬醫補 樂長

四十八

砲工兵上等監護 砲工兵監護 監査 諸工長 同下長

四十五

中少尉

三十五

第二十九條 前條ノ年齡定限アリト雖モ猶任用ニ堪エ若シ

ハ材能特拔ナル者ニ於テハ上長官士官並ニ會計軍醫馬醫

服役期限算則

各部右同等ノ輩ハ陸軍卿ヨリ留任ヲ命シ准士官以下ハ所部ノ長官ヨリ請求シテ留任ヲ請フヲ得ヘシ但強テ致仕ヲ願フハ此例ニ在ラス

第三十條 其他軍法會議ノ列位要塞參謀科文庫主管等老練ノ人ヲ要スル職務ハ皆陸軍卿上條ノ例ニ準シ時宜ニ依テ之ヲ取捨スヘシ

第三十一條 凡ソ恩給ノ爲ニ服役年限ヲ算計スルノ法ハ陸軍ニ於テハ二十歳未滿ヲ算スルコトヲ得ス二十歳未滿ノ者ハ當人自己ノ意ヲ以テ就役ノ約ヲ結ビ得サルモノトス

第三十二條 服役年限ノ始期ハ左ノ如シ

其一 明治四年八月ヲ以テ始期トス故ニ其以前ヨリ勤仕ノ者ト雖モ都テ同月ヲ以テ始トス

其二 徵兵ハ入營初日即チ毎年四月二十日ヨリ起算スヘシ

其三 壯兵其他諸種ノ方法ニテ入隊ヲ得ル者ハ入隊當日ヨリ起算スヘシ

第三十三條 徵兵補充兵ノ後來入隊シタル者恩給ヲ受ルルニ至ルノ期ハ其補充兵在役ノ期ヲモ算シ常備入營期日即チ四月二十日ヲ以テ起算スヘシ

第三十四條 其軍人一時旗下現役ニ就クノ後轉シテ後備軍(但シ下士以上)ニ入ル者ハ何等ノ名義タルヲ論セス後備軍ニ在ルノ時日ヲ服役實期トシテ之ヲ算ス(此條現今未ダ行ナハス)

第三十五條 其軍人海軍ニ奉仕シ其恩給ヲ受ルノ權ヲ有スル者合格ノ故ヲ以テ轉シテ陸軍ニ奉仕スルハ以前海軍服役ノ實期ヲ以テ陸軍服役ノ實期ト通算スルコトヲ得

文官ヨリ武官ニ轉スル者ハ以前奉仕ノ時日ヲ以テ陸軍服役

役實期ト通算スルコトヲ得ス

十一月十一日
第四百七十六號
此條中
非下教
導生ノ
五字及
下士官
ノ字ヲ

第三十六條 服役ノ算計第三十一條ノ如シト雖モ陸軍士官
學校生徒並ニ成業ノ上士官ニ任スル者ハ其學期ノ若干ヲ
論セズ概シテ就任ノ前二年ヲ通算スルコトヲ得幼年學校
ノ生徒ハ滿十七歳ニ至リシヨリ通算スルコトヲ得軍醫部
ノ士官以上ハ軍醫劑官ノ別ナク又陸軍軍醫學校ヨリ出身
スルト他ヨリ出身スルトヲ論セス其軍醫補ニ任スルノ日
ヨリ前三年ヲ通算スルコトヲ得
馬醫部ノ上長官士官モ亦軍醫ト同シク馬醫生ニ任スルヨ
リ前二年ヲ通算スルコトヲ得ヘシ
以上生徒通算ノ年數如斯定ムト雖モ學校長官ノ證書ニ因
リ或ハ之ヲ延縮スルコトアルヘシ

第三十七條 教導團生徒ハ其入團ノ日ヨリ其他火工銃工等

公上達、点
ノ十三字ヲ

ノ生徒ハ十七歳以上ハ奉命ノ日ヨリ十七歳以下ハ滿十七
歳ニ至リシヨリ停年恩給ヲ受ルノ例ニ算入スルヲ得

第三十八條 若シ國民軍ヲ現役ニ徵發スルコト有テ既ニ恩
給ヲ受テ退職シタル軍人再ヒ國民軍現役ニ就ク時其恩給
ハ其現役ノ給料ト共ニ之ヲ受ルコトヲ得ヘシ然レモ前後
ノ服役實期ヲ通算シテ其恩給ヲ增加スルヲ得ス但シ從軍
傷疾疾病ノ事アレハ其時ノ殊典ニ從フ

第三十九條 其上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各
部右同等ノ輩服役實期末ヲ二十五年ニ滿タル前免官セ
ラレ後再ヒ現役ニ復シタル者ハ免官以前ノ服役時日ヲ恩
給ノ期限内ニ算入スルヲ得但シ中間斷ノ時日ハ之ヲ除
クヘシ(非職ハ其非職中ノ年數モ合算ス)

其官階前後同等ナル時ハ直ニ其官階ニ屬スル恩給ニ從

全上達六箇
月ノ下ハ十
五日ノ三
字及未文
別ノ字

從軍年
ノ算則

然レモ服役ノ時ノ官階前時ヨリ降ル時ハ退職ノ月其官階ニ屬スル恩給ノ外ヲ望ムノ權ナシトス

第四十條 逃亡以前ノ服役モ亦其以後ノ服役ト通算スルコトヲ得ヘシ然レモ後ノ服役ハ處刑後復隊ノ日ヨリ起算ス

第四十一條 凡ソ軍人服役中懲罰五日以上コ上ル者ハ除テ算セス其除算ノ法七日マテハ一ヶ月ヲ除キ二七日ハ二ヶ月ヲ除キ三七日ハ三ヶ月ヲ除キ四七日ヨリ三ヶ月迄ハ半年ヲ除キ三ヶ月以上六ヶ月迄ハ一年ヲ除キ餘ハ其實期ヲ算シテ之ヲ除ク

第四十二條 軍人停年恩給ヲ受クヘキ服役期限コ達スル者ハ其年限ノ中ニ從軍年ヲ算入スルヲ許ス其法左ノ如シ

第四十三條 其實期ノ中ニ從軍年ヲ二倍シテ算入スルハ戰時日本外ノ戰地服役

第四十四條 其實期ノ中ニ從軍年ヲ全年トシテ算入スルハ

第一 内地戰時ノ定ニテ戰闘ニ因テ世ノ靜謐ヲ復スルニ與カリテ力アル時

第二 戰時平時ヲ論セス日本外ノ地ニ於テ鎮戍シタル軍隊ニ在ル時

第三 海戰ノ時ニ當リ其船中ニ在ル時

第四 平時新嘉坡ヨリ西ニ聖佛朗士西哥ヨリ東ニ差遣シテ服役セシメタル軍人

第五 北海道ノ衛戍其他該地ニ半年以上札駐スル兵役ニ服シタル軍人

第四十五條 實期ノ中半數トシテ之ヲ算入スルハ海戰ノ時ニ當リ海岸防禦ノ服役

第四十六條 戰時虜獲ニ逢ヒ外國ニ俘囚トナリタル時日ハ

傷疾ノ願
病ノ願
書ノ願
別就
ノ處
處段

猶現役ニ在ルカ如ク之ヲ算ス

第四十七條 凡ソ恩典トシテ從軍年ヲ算スルノ法ハ其期十二ケ月ニ足ラサル者ト雖ヒ之ヲ滿一年トシテ算ス然レヒ十二ケ月間假令ヒ數回ノ軍役ニ從フト雖ヒ之ヲ二年以上トシテ算スルコトヲ許サス

其一期一年以上ニ跨カリ十二ケ月ニ餘ル所ノ分數ハ之ヲ全一年トシテ算スルコトヲ得

第四十八條 從軍年ヲ算入シ及ヒ刑罰ニ因テ除キタル年月ヲ折算シテ其計算ヲ進達書ノ裏面ニ記載スヘシ

第四十九條 凡ソ傷疾疾病ニ由テ退職恩給ヲ願ハント欲スル者ハ其服役ヲ離ル、前ニ之ヲ願フヘシ

第五十條 如此キ軍人ハ傷疾疾病ノ原因ニ依リ合格ノ年齢ノ前ニ恩給ヲ得ント欲スルヲ以テ其傷疾疾病ノ原因症候

トモ極メテ曲節ヲ悉シ之ヲ陳述スルコト必要アリ

第五十一條 其傷 疾病ヲ受ケシ事故並ニ原因ハ之ヲ證明スヘキ公ケノ報告若シハ他ノ公文ニ係ル書類ヲ據証トナシ疾病ヲ受ケシ時刻並ニ其時ノ景況ハ陸軍官憲ノ(戰地ノ司令官分遣隊ヲ司令スル下士大隊長幕員士官等ニテ二人若シハ三人ノ証人ノ前ニ認メタル)証書ヲ據証トシ又ハ其官憲ヨリ發シタル報告若シハ查問會議ノ書ヲ據証トナスヘシ

右ノ據証ニ供スル書中ニハ其傷疾ノ性質及ヒ之ヲ受ケタル時刻之ヲ受ケタル地所並ニ戰爭間ニテモ公務上ニテモ之ヲ受ケタル時ノ景況ヲ特別ニ奉章シ又凡テ醫家ノ診斷ニテ不治トナス者ハ悉ク之ヲ記載スヘシ

第五十二條 其傷疾疾病ノ不治タルコトハ陸軍病院ノ病院

長若シハ最後ノ治術ヲ施シタル市井病院ノ醫長ヨリ特別ノ證書ヲ以テ之ヲ確証スル者ニシテ此證書中ニ傷痰疾病ノ原因症候是ニ施シタル醫療ノ方法ヲ述ヘ以テ其不治タルヲ明カニ申述スヘシ

其軍人右ノ病院ニ就テ治療ヲ受ケサル者ニハ陸軍病院若シハ市井病院ノ醫長診察ノ上ニテ證書ヲ授クヘシ

第五十三條 退職ノ願書ハ其軍人ノ屬スル隊ノ會計會議若シハ鎮臺司令將官ヨリ指定シタル隊ノ會計會議ヨリ其保證書類ト共ニ司契ニ送付ス司契此書類凡テ例規ニ合ヒタルモノト認ルルハ之ニ檢印署名シ之ヲ鎮臺司令將官ニ呈ス是ニ於テ司令將官ヨリ軍醫正二員並ニ初メ證書ヲ認メタル者ノ外其隊ニ屬スルト他隊ニ屬スルトニ論ナク軍醫若クハ軍醫副補ノ内二人ヲ命シ之ヲ檢査セシム

十一月十一日
第七十六號
第四百一號

全上達此條
及六十六條
ノ證書
ト改

第五十四條 其命セラレタル所ノ軍醫ハ司契並ニ其隊ノ會計會議員ノ前ニテ檢査ヲナシテ後檢査口供ヲ作ルヘシ（但メノ診斷證書陸軍病院長ノ證書ナレハ此口供書ヲ作ルニ及第第五十五條ノ診斷證書ノミ作ル可シ）而シテ此時兩軍醫ノ診斷否ナル時ハ其恩給願ハ他日ニ延ハシ司契ハ兩軍醫ノ口供書ヲ取り之ヲ記室ニ納ムヘシ總テ檢閱使又ハ平常ニテハ鎮臺司令將官ハ如此キ場合ニ於テハ其兩軍醫ヲテ手術ヲ行ハシムルヲ得

第五十五條 其兩軍醫ノ檢査ニテ當該軍人退職恩給ヲ受ルノ權アリト認ムル時ハ兩軍醫更メテ診斷證書ヲ作ルヘシ此證書ハ別ニ一通ノ寫ヲ作り先ノ口供書ニ綴リ込ミ一包トナシテ檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官ニ呈スヘシ

第五十六條 檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官ハ此書類並ニ檢査口供書ヲ一覽シタル後先キニ命シタル二員ノ軍醫正

合上達脚註
ヲ加

ヲシテ其面前ニテ查覈ヲナサシムヘシ
而シテ司契ハ此查覈ヲ助ケ此查覈ヲ就テ再ヒ口供書ヲ作
リ（但初メノ診斷證書陸軍病院長ノ證書ナレハ此口
供書ヲ作ルコト不及覆數診斷證書ノミ作ル可シ）而シテ二員ノ軍醫正ハ
新ニ證書ヲ作テ其口供書ニ綴リ込マシムヘシ

第五十七條 此查覈ヲ經テ願意本ツク所アリト認メタル時
ハ檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官之ヲ會計會議ニ下シ退
職恩給許可ヲ請フノ進達帖ヲ作ラシメ而シテ監督查照ヲ
遂ケ將官可トスルノ後其帖ト諸書類並ニ其願書ニ就テ自
己ノ意見ヲ記シタルトチ併セテ其包内ニ入レ之ヲ陸軍卿
ニ呈ス

第五十八條 其軍人屬スル所ノ隊ヨリ離レテ遠方ニ在ル者
ハ鎮臺ノ司令將官ノ命ニテ其近隣ノ隊ニテ其願書ノ扱ヒ
ヲナサシムヘシ

第五十九條 恩給ノ願文ハ一次ニ服役停年ト傷痰疾病トヲ
主意トシテ之ヲ認ムルコトヲ得ス其軍人停年ノ恩給ヲ受
ル權利ヲ有シ同時ニ傷痰疾病ノ恩給ヲ願ハント欲スル者
ニハ先ツ其願文何レノ式ヲ用ユヘキヤヲ問ヒ而シテ自
ラ撰フ所ニ應スヘシ

第六十條 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右
同等ノ輩服役實期十五年以上ニ至リ病氣ニテ三年來非職
ニ在リ現役ニ復ス可ラサルカ爲ニ退職ヲ許サル者ハ初
メニ查問會議ニ於テ之ヲ檢査シ會議ノ商評之ヲ應當ナリ
ト決スル時ハ直チニ退職ノ進達帳ヲ作ラシム此進達帳會
議ノ口供書ト共ニ陸軍卿ニ達スル時ハ卿之ヲ處分シ該官
ヲシテ退職ニ因テ罷役後恩給ヲ受ルコトヲ得セシム

第六十一條 停年ニ就テ恩給ヲ仰クノ權アル軍人登時事故

服役ニ在テ
ハ軍人特
別ノ處置

アリテ服役ヨリ引去リタル者ハ其願書ヲ要用ノ書類(服役ノ明細書並ニ身元履歷書)ト共ニ取揃ヘテ其軍管ノ鎮臺ノ司契課ニ致スヘシ司契課ニテ之ヲ檢査シ書類ニ檢印署名シ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈スヘシ

第六十二條 其軍人傷痰疾病ノ爲ニ増給ヲ請フ者ハ左ノ方法ニ從フヘシ

若其傷痰疾病ニ因テ既ニ恩給ヲ受ルノ後引續キ重症ニ趨キ一肢ヲ失フニ至ラシメタル時ハ當該軍人其恩給ニ就テ更ニ増算スルヲ得ヘシ

又第一號休暇ヲ得テ罷役ニ入リタル後其傷痰疾病以來引續キ重症ニ至リタル軍人上ト同一ノ事情アルニ臨ンテハ恩給ヲ仰クコトヲ得ヘシ但シ前ノ第九條ニ揭示スル所ノ症候アル者ニ限ルヘシ

凡テ如此キ軍人ノ情願ハ其現役ヲ離レシ日ヨリ算シテ一年内ナレハ之ヲ達スルコトヲ得ヘシ然レモ其傷痰疾病一肢ノ切斷ヲ促シ或ハ兩眼ヲ盲スルニ至リタル者ニハ延イテ三ケ年内ニ至ルヘシ

第六十三條 其願書ハ鎮臺ノ司契課ニ致シ其保証ノ書類ヲ副フヘシ其書類ハ

第一 當該軍人服役ヲ離レシ時其傷痰疾病ハ例規ニ準シ査覈ヲ受ケタルヲ證スル諸公文

第二 現役ヲ退キタルヲ證スル休暇免狀並ニ諸公文

第三 軍醫ノ診察ヲ口供書並ニ診斷證書 是ハ軍人市井ノ籍ニ復セシ以來其療用ヲ受ケタル軍醫ヨリ其傷痰疾病引續キ重症ニ變シタルヲ以テ退職恩給若クハ計算増加ヲ願フニ至ルヲ證スル者

但シ軍醫ナキ地方ニ於テハ市井ノ醫員執ヒ一人外二人
ニテ診斷シ府縣廳ノ役員立會ノ上證書ヲ認メ役員與印
シテ所管鎮臺ノ司契課ニ致スヘシ

第六十四條 司契課ニテ之ヲ受ケタル時其日附ヲ檢シ期限
内ニ在レハ鎮臺ノ司令將官ニ呈シ將官一覽ノ後再ヒ司契
課ニ下シ前時ノ書類ト照査シ前時ノ軍醫正ヲシテ其口供
書ニ就テ之ヲ檢實セシメ非違ナキ時ハ將官ヨリ前時ノ隊
若クハ近傍ノ會計會議ニ下シテ第二十四條並ニ第四十九
條以下ノ例ニ從ハシム
司契課ニテ之ヲ受ケタル時其日附ヲ檢シ若期限外ニ在レ
ハ之ヲ還付ス然レモ司契故ナク之ヲ收受セサル時ハ當該
ノ軍人直ニ司令將官ニ歎訴スルヲ得
第六十五條 寡婦扶助料其夫ノ傷庚ニ基ツク者ハ其傷庚ニ

寡婦孤兒ニ
就テ特別ノ
處置

受ケタル事故ト傷庚ノ質トノ照査ニ供スヘキモノアルヲ
主トスルノ前條軍人ノ傷庚ニ就テ揭示スル所ノ如シ而シ
テ之ヲ證スル者ハ軍醫若クハ市井醫員ノ公文證書ニシテ
其文中ニ當該ノ患者竟ニ其傷庚ニ由テ死ニ至リシヲ陳
述スヘシ

若其死没一旦傷庚平復ノ後ナルモハ其寡婦第十三條第三
款ニ揭示スル處置ヲ仰シコトヲ得ス故ニ其死去戰地ノ事
故ニ源因スル時ハ其證據ニ供スヘキ公ケノ報告若クハ其
事故ヲ確證スル公文若クハ陸軍官憲ノ證書若クハ其官憲
ノ報告或ハ査問會議ノ書類等ノ内其一ヲ以テ保證ニ供シ
且上ニ舉ケタル醫員ノ證書ニテ其事故直ニ當該軍人死
没ノ源因タルヲ明証スヘシ

此兩証ヲ有スレハ其寡婦其夫ノ死去ノ日其住スル區ノ戸

長ニ報スル死去ノ証書中ノ日附ヨリ六ヶ月以内ニ其願書ヲ呈スルヲ許ス

第六十六條 其死没ノ源因疫癘傳染ニ係ル者ハ其証據ニ供ス可キ者左ノ如シ

第一 府縣若クハ陸軍官憲ノ証書 是ハ其軍人死去ノ節其死去セシ地方ニ於テ其疫疾流行セシコトヲ証スル者

第二 陸軍官憲ノ証書 是ハ當該軍人ノ死没其服役中ニ在テ疫疾ニ罹リタルヲ証スル者

第三 醫員合式ノ証書 是ハ當該軍人死去セシ病院ノ院長軍醫若クハ此患者ノ執ヒタリシ陸軍若クハ市井ノ醫員ノ診斷書ナリ若軍醫ノ診斷證書ヲ得ヘカラサル時ニハ其地方ノ府縣若クハ陸軍ノ官憲ヨリ遣ハシタル檢官ノ證書ヲ附スヘシ

第六十七條 疫癘傳染ニ由テ死没ニ至リシ軍人戰地若クハ

公務ノ外ニ於テシ又戰地ニテ之ヲ受タルモ一旦平復ノ後ナルトハ此例ニ在ラス

第六十八條 凡テ寡婦ヨリ出願スルニ就テ證據ニ供スヘキ件々ハ當該軍人ノ孤兒第十六條ノ例規ニ準シ其母ニ代ハル時モ亦異ナルコトナシ

願出ノ地方

第六十九條 寡婦孤兒扶助料ノ願書ハ居住地ノ府縣廳ヨリ

外國ニ在ル者ハ外務省ヨリ北海道ニ在ル者ハ開拓使ヨリ内務省ニ移シ内務省ヨリ陸軍省ニ照會シ陸軍省ヨリ當該軍人本屬ノ鎮臺ニ下シ查覈ノ上再ヒ陸軍卿ニ呈シ卿之ヲ正院ニ移スヲ第七十六條ノ如シ

第七十條 其願書ハ寡婦ノ扶助料ナレハ寡婦ノ主名コトテ親族若クハ其郷里ノ戸主二名証人ニ立テ連名タルヘク孤兒

十一月十一日
第七百四十六号
又ハナ及ヒ
ニ改

合号達(婚
細書)ヲ
訓書ニ改メ
モ以下四
十字ヲ

合達、ノ
四字ヲ加

兵庫縣布達便覽上卷兵務之部

二百廿八

ノ扶助料ナレハ後見人一名及ヒ親族若シハ其郷里ノ戸主
ニ名証人ニ立テ連名タルヘシ而シテ區戸長之ニ奥印スヘ
シ

第七十一條 寡婦扶助料夫ノ傷痰疾病ニ基ツク者ハ第六十
五條若シハ第六十六條ノ証書ノ外夫ノ服役明細書婚姻證
書ト並ニ男女子アレハ其年齡書ヲ副フヘシ若シ男女子年
齡書ニテ其配合ヨリ生レタルコトヲ證シ戸長ノ奥印アレ
ハ婚姻證書ニ及ハス

第七十二條 停年恩給ニ基ツク寡婦ノ扶助料願書ニハ其夫
ノ服役明細書婚姻證書男女子年齡書其夫ニ政府ヨリ給シ
タル恩給番號登錄寫帖即チ恩給證書ヲ副フヘシ
第七十三條 其遺孤母ナク直チニ父ノ傷痰疾病ニ基ツク恩
給ヲ受ル者ハ婚姻屆書ヲ除キ母ノ死去若シハ離縁ニ屆ケ

退職恩給
ノ計算

シ證ヲ出スノ外第七十一條ノ例ニ異ナルコトナシ其母死
去ノ後恩給ヲ繼シノ孤兒ハ恩給番號登錄寫帖即チ恩給證
書ヲ副フヘシ

第七十四條 下士兵卒並ニ同等ノ輩退職恩給ヲ獲ルノ權ヲ
得タル者ハ其免役ノ時ニ當リ其恩給許可ノ命下ルマテ其
隊ニ駐マルヘシ然レモ直チニ歸郷ヲ願フ者ハ亦自在タル
ヘシ但シ其歸郷ヲ願フ者ハ發程ノ日ヨリ除隊スヘシ
右ノ除隊ニ屬シタル者ハ發程ノ日ヨリ陸軍定額内ヨリハ
旅費ノ外一切之ヲ給スルコトナシ
其傷痰疾病ニ基ツキ退職ヲ許ス者ハ其所屬ノ隊ニ止マリ
計算進達ノ日ヲ待ツヘシ

第七十五條 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部
右同等ノ輩服役停年ニ由テ退職ヲ願ヒタル者ハ其進達帳

兵庫縣布達便覽上卷兵務之部

二百廿九

陸軍卿ノ受領ヲ歴タルノ報ヲ得ルノ後ニアラサレハ其所
 屬ノ隊ヲ離ル、コトヲ得ス然レモ其情願ナレハ檢閱使直
 ナニ俸給ノ半額ヲ給シテ之ニ六ヶ月ノ休暇ヲ給フコトヲ
 得而シテ己ムヲ得サルノ事故アリテ其鎮臺ノ司令將官並
 ニ其隊ノ首長之ヲ保證スルモ更ニ休暇ノ願ヒヲ許シ猶
 六ヶ月ノ休暇ヲ給フヲ得ヘシ但シ休暇間ノ月日ハ計算ノ
 時之ヲ除ク

第七十六條 凡ソ計算ハ陸軍卿之ヲ主任シ合式ノ恩給計算
 書ヲ作り之ヲ正院ニ移ス
 其傷痍疾病ノ恩給ニ係ル者ハ預メ其證憑書類ト共ニ陸軍
 軍醫總監ノ會議ニ付シ而シテ後ニ之ヲ計算ス
 正院ニテハ計算書ヲ大藏卿ニ移シ點檢ヲ歴テ再ヒ正院ニ
 移シ正院ヨリ恩給許可ノ令ヲ內務陸軍兩卿ニ移シ其所轄

ヲ歴テ當該人名ニ下サシム
 第七十七條 停年恩給ハ之ヲ受ル軍人ノ官階ニ準スルヲ例
 トス然レモ其官階ニ進ミ現役ニ服スル未タ進級條例ノ停
 年最下限ノ半ニ至ラサル前ニ退職ヲ願フ者ハ前官ニ準シ
 テ之ヲ賜フヲ例トス

第七十八條 凡テ上長官士官准士官下士並ニ同等ノ諸官其
 官階ニテ現役ニ服スルコト十二年滿限(上長官士官准士官
 並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ非職ヲモ算ス)ノ
 者ニハ其官階ニ屬スル恩給五分ノ一ヲ以テ之ヲ増スコト
 ヲ得

此特別ノ例ニ係ル恩典ハ或ハ停年ニ由リ或ハ傷痍疾病ニ
 由リテ表中最上限ノ權ヲ有スル者モ亦是ニ與カルヲ得
 第七十九條 恩給計算ヲナスニ當リ其軍人前官ニテハ十二

年滿限ニ當リ五分一ノ増加ヲ得ルヲ以テ其増加ノ額現在ノ官階ニテ算スルヨリモ較上ル者ハ前官ニ準シテ之ヲ算スルコトヲ得

第八十條 毎年政府會計ノ期ニ於テ從來各種ノ恩給ニ就テ其年ノ通計ヲ以テ來年ノ多寡ヲ量リ大藏卿ヨリ正院ニ上申シ決議ノ上太政大臣ヨリ大藏陸軍兩卿ニ之ヲ下付ス

第八十一條 凡ソ恩給受領ノ者ハ内務省ヨリ其居住地ノ府縣廳ヲ歷テ其恩給登錄寫帳即チ恩給證書ヲ受領シ是ニ據

十一月十一日
第七百四十一號
第七十六號
下ニ扶助ウノ
三ノ字ヲ除ク

テ年々府縣廳ヨリ金圓支給ヲ仰シテ得

其當該人名恩給證書ヲ受領スルノ前ニ陸軍卿ヨリ計算ノ告示ヲ該名ニ下シ其中ニ計算ヲ立ル本則ト之ニ屬スル諸事ヲ告示ス

罷役後恩給

第八十二條 罷役後恩給ハ上長官士官準士官並ニ會計軍醫

馬醫軍樂各部右同等ノ輩罷役ニ入ルノ初メ服役實期十五年滿限ノ者ニ非レハ之ヲ受ルコトヲ得ス

其給額ハ當該上長官士官準士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩官階ニ準スル恩給ノ最下限ノ給額三十分ノ

一ヲ以テ服役實期ノ年數ニ乘レテ給ス但シ罷役後恩給ハ從軍年並ニ十二年停年ヲ算入スルノ恩典ナシ

第八十三條 罷役後恩給ハ當該軍人ノ生涯ニ止リ變レテ寡孤扶助料トナルコトナシ

第八十四條 軍人疾病不治ノ症ニ因テ罷役ヲ願フ者ハ其願書疾病ノ爲メノ退職願ノ如ク之ヲ扱フヘシ

其不治タルヲ証スル爲ニ診斷ヲナス醫官ハ鎮臺司令將官ヨリ之ヲ命ス

其診斷不治ト決スル者ハ會計會議ニ付シ爾後ハ第五十三

條以下ノ諸條ニ開列スル所ノ方法ニ準スヘシ

第八十五條 其上長官士官準士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩軍紀ヲ犯シ懲治ノ爲ニ罷役ニ入ル者恩給ヲ賜ラノ例ニ在ラズ

第八十六條 恩給ヲ受クルノ始期ハ左ノ如シ

第一 計算ノ告示ノ日ヨリ之ヲ給ス即チ陸軍ノ簿籍中該名ヲ除クノ日ナリ

第二 計算告示ノ日既ニ休暇ニ在ル上長官士官準士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ許可ノ令下ル日ヨリ之ヲ給ス其隊ヨリ發程シタル何ノ日ニ在ルヲ論セス

若當該上長官士官準士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩休暇ノ俸ヲ受ケタルモノハ恩給ヲ受ルノ日ヲ

恩給ノ支
給並ニ請
求

限リ休暇俸ノ餘金ハ陸軍省へ返納ス

第三 下士以下モ亦前條ニ同シ其休暇俸ハ之ヲ願フノ權利ナシ

第四 當該軍人死去シタルトキ家族扶助料ハ其死去ノ翌日ヨリ給ス

第八十七條 凡テ恩給並ニ扶助料ヲ受クルノ始期ハ陸軍省ヨリ内務省へ通報シ四季ノ首月毎ニ前三箇月分其府縣廳ヨリ金額ヲ支給ス

第八十八條 金額ヲ受領スル者ハ當該人名ニテモ代人ニテモ登録寫帳ノ證書ヲ持參シ支給人披見ノ上其區戸長ヨリ出セル本人存生ノ證書並ニ金額受領證書ト引替コテ之ヲ交付スヘシ但シ外國ニ在留セル其本人存生ノ證書ハ日本ノ公使若クハ領事官ヨリ差出スヘシ

第八十九條 若シ金額ヲ受ル當該人名前三ヶ月以來死去シタル時ハ支給人戸長ヨリ出セル死去ノ證書ニ對シ日割(一ヶ月三十日トス)ヲ以テ其金額ヲ給シ受領證書ヲ取り其權利消絶ニ屬シテ移轉ナキ者ハ其登錄寫帖ノ證書ヲ收メ府縣廳ヨリ内務省ニ還付シ而シテ陸軍省ニ報告スヘシ

第九十條 其權利未ダ消絶セズシテ移轉ニ屬スル者ハ登錄寫帳ヲ還ヘシ其寡婦若クハ孤兒扶助料願出ノ證トナサシム

第九十一條 恩給番號登錄寫帳ノ證書ハ其裏面ニ四首月ノ金額ヲ記シタル者ナリ若恩給ヲ受ルノ人其證書ヲ盜難水火災等ニテ失亡スル時ハ速カニ届ケ出ヘシ然ル時ハ猶第二寫帳ヲ受ルコトヲ得ヘシト雖モ第二寫帳ヲモ失亡スル時ハ最早之ヲ受ルコトヲ得ス其恩給ハ唯生存ノ證書ノミ

ニ就テ之ヲ給スヘシ

第九十二條 若陸軍恩給ヲ受ルノ人其本管即チ證書中記載ノ地ナラスシテ他府縣ニ就テ金額ヲ受領セント欲スル者ハ此事ニ就テ其府縣廳ヲ歷テ出願スヘシ

右願書ハ四首月ノ一日ヨリ二箇月前ニ出スヘシ此期限ヨリ遅延ニ及ヘハ從前ノ府縣廳ニ就テナラテハ之ヲ受領スルコトヲ得ス

第九十三條 日本外ノ地ニ寄留ノ許可ヲ願フハ地方官憲ノ手ヲ歷テ内務卿ニ願フヘシ其願意至當ナレハ内務卿ノ處決ニ因テ恩給若クハ扶助料一箇年分ノ前借ヲ許スヘシ

第九十四條 前四條ニ揭示セル所ニ拘ラス恩給並ニ年々ノ扶助料ハ一ケ年ノ間棄置キ請求セサル時ハ大藏省ノ恩給簿ヨリ之ヲ削リ去リ再ヒ請求スト雖モ前時ノ金額ヲ得ル

權利消絶ノ

ノ權ナシ

計算ノ請求

又寡婦孤兒等當該軍人ノ死去ノ日ヨリ一箇年ノ間其事狀ヲ密カニシテ願出サル者ハ其權利消絶ニ屬ス

第九十五條 陸軍恩給ノ計算金額ニ就テ違算ノ廉アリト思フ時ハ初メテ金額ヲ受領セシ日ヨリ三ヶ月以内ニ之ヲ願出ルヲ得ヘシ但シ萬一粗漏ニ屬スル時ハ其權利消絶スヘシ右ノ請求ハ地方所管鎮守司契課シ手ヲ歴テ陸軍卿ニ願フヘシ

第九十六條 凡ソ恩給ヲ仰ク者故テニ年月ヲ算スルコト實ナラス或ハ傷痕疾病ニ托シ或ハ寡孤ナリト偽ハル等上告實ヲ以テセサル者ハ國成典アリ其發覺該官致仕ノ前ニ在リハ軍法ニ處シ致仕ノ後ニ在リ若クハ其他ノ者ニ係レハ常律ニ處スヘシ

陸軍罷役俸並恤金令

陸軍罷役俸並恤金令

罷役俸

第一條 凡ソ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役期年滿十一年ノ者ニ非レハ罷役ニ就クト雖モ絶テ俸給ヲ得ルノ權ナシ

第二條 凡ソ罷役ニ入ル上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役期年滿十一年ニ至リ未ダ十五年滿限ニ至ラサル者ハ其就役年間ノ半ニ均シキ年間罷役俸ヲ受ルヲ得此罷役俸ハ其官階ニ準スル退職恩給ノ最下限三分ノ二ニ均シトス

第三條 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同

等ノ輩罷役俸ヲ受ルノ權利ハ陸軍卿ノ確定セル計算ニ基
 ツキ正院ニテ之ヲ覆勘ス其方法凡テ退職恩給ノ例ノ如ク
 第四條 計算ノ本則ハ亦陸軍卿ヨリ公券ヲ以テ當該ノ人名
 ニ知告シ其服役實期ノ委曲並ニ罷役俸ヲ受ル權利ヲ有ス
 ルノ月ヲ開示ス此公券ハ支給許可ノ證書ト共ニ當該軍人
 ノ居住スル地方所管鎮臺ノ司契課ニ下シ司契課ノ官人署
 名檢印ノ上ニテ府縣駐在曹長ヲ媒シ當該軍人ニ下附ス
 第五條 計算請求ノ權並ニ權利停止ノ項ハ恩給令ノ第九十
 四條並ニ第四條ニ異ナルコトナシ
 第六條 罷役俸ノ支給ハ四首月ニ於テ前三ヶ月分該管鎮臺
 ノ司契課ヨリ府縣駐在曹長ヘ移シ當該人名ニ交付シ受領
 證書ヲ出サシム其受領證書ニハ生存ヲ証スル爲ニ戶長ノ
 奥印ヲ受テ出サシム

第七條 凡ソ罷役俸ヲ受ルモノハ府縣駐在曹長ノ請ニ應ジ
 其度毎ニ公券ヲ出シ示スヘシ
 第八條 若當該ノ軍人先期ニ死去セタル時ハ駐在曹長ニ
 テ其金圓ヲ交付セス死去ノ月日ヲ審カニシ鎮臺司契課ニ
 報シ日數ニ準シ殘餘ノ金圓ヲ受テ之ヲ當該軍人ノ嗣子若
 シハ親族ニ交付シ其公券ヲ取テ司契課ニ還付スヘシ
 總テ此手數ヲ省シ爲ニ罷役俸ヲ受ルノ軍人死去ノ度毎ニ
 月日ヲ審カニシ府縣駐在曹長ヲ媒シ當該ノ司契課ニ報告
 スルヲ要ス
 其定期盡ル者ハ最後ノ金額ヲ交受スル時公券ヲ還付シテ
 皆濟ヲ証スヘシ
 第九條 罷役俸ヲ受クルノ軍人居住ヲ移シ他ノ管廳ニテ免
 換票ヲ交授セント欲セハ其旨ヲ以テ四首月一日ヨリ二ヶ

罷役
恤金

月前ニ當該ノ司契課ニ願書ヲ呈スヘシ但シ移住地並ニ其
 移住ノ月日ヲ審カユスヘシ

第十條 罷役俸ハ一週年乘置キ請求セサル時ハ之ヲ其權利
 消絶セシモノトシテ司契課ノ簿籍ヨリ其名ヲ除ク

第十一條 凡ソ下士兵卒並ニ同等ノ輩陸軍ニ奉仕シ疾病ヲ
 受ケ若クハ公務中傷痍ヲ受ケテ罷役ニ入り傷痍疾病ヲ受
 ケタル故ヲ以テ扶助ヲ仰クヲ要スル者服役實期滿九年ノ
 後ナレハ罷役恤金ト名ケタル恩典ニ與カルコトヲ得此恤
 金ハ二季ニ分テ月頭ニ支給スルモノナリ

第十二條 下士兵卒並同等ノ輩服役中受ケタル傷痍疾病ニ
 由テ第一號ノ休暇ヲ與ヘ罷役ニ入りタル者ハ此給料ヲ願
 フコトヲ得

第十三條 此恤金ヲ受ル者ハ他ノ職役ニ就クカ又ハ他ノ營

業ヲ爲スカ或ハ本人不行跡若クハ粗暴ノ失錯アレハ陸軍
 卿此恤金ヲ停止スルコトヲ得

此故ニ鎮臺ノ將官ハ府縣ノ官憲ニ依頼シ時々報告ヲ取り
 之ヲ陸軍卿ニ呈ス

第十四條 此恤金ハ其實一身ノ口ヲ糊スルヲ目的トスルヲ
 以テ若當該ノ罷役軍人死シテ之ヲ埋葬スルニ其家費ヲ盡
 スノ急乏ニ逢ヘハ陸軍官憲ノ願ニ依テ陸軍卿其家族ニ一
 期六ヶ月分ノ金額ヲ給與スルコトヲ得

第十五條 總テ軍人罷役ニ入り又ハ唯服役ヲ免セタル者ハ
 登時之ヲ願フノ志趣ナシト雖後日若シ此恩典ヲ願ハント
 欲スル者ノ爲ニ一箇年ノ猶豫ヲ假ス其一旦此恩典ヲ受ケ
 タル後再ヒ之ヲ願ハント欲スル者モ同シク此猶豫ヲ假ス
 ヘシ

第十六條 此恩典ヲ請フノ進達書ハ其人ニ就テ其隊ノ長官
 之ヲ作り其内ニ必ス當該軍人退居セント欲スル地名ヲ開
 列スヘシ而シテ之ニ副ツヘキ書類左ノ如シ

第一 軍醫診斷証書 是第一診斷並ニ覆覈診斷ヲ兼ル者
 ニシテ其傷痕疾病ノ罷役ニ至ラメタル景況ヲ精確仔
 細ニ記述スル者ナリ

第二 其傷痕疾病ノ原因証書 是病因ヲ詳カニスル者ニ
 シテ若其病因明確ニ証スヘカラサル時ハ其軍人發病ノ
 時ノ景況ヲ叙シ病症ニ就テ臆斷ノ原因ヲ書スヘシ

第三 其軍人ノ服役並人相ノ記載書並ニ身元明細書ヲ添
 フヘシ

第十七條 當該軍人ハ該隊中ニ在テ進達ニ就テノ處決ノ來
 ルヲ待ツヘシ但シ直ニ歸郷ヲ願フ者ハ其意ニ任ス

許可
法式

第十八條 其隊ノ長官ハ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈シ司令將
 官ハ之ヲ陸軍卿ニ移シ卿又之ヲ陸軍軍醫總監ノ會議ニ付
 シテ其覆檢ヲ歷ルノ後陸軍卿其年々ノ金額ト之ヲ受ルノ
 始期トヲ定ム

第十九條 凡此恩典ヲ受タル軍人ハ其姓名ヲ書シタル券狀
 ヲ受ク是ハ唯二ケ年間ノ價直ヲ有スル者ニシテ之ニ陸軍
 省ニ在ル恩金本帳ニ登錄シタル番號ヲ附ス

第二十條 其軍人此券狀ヲ受ケテ罷役ニ入りタルハ直ニ
 ニ軍隊ノ簿籍ヨリ其名ヲ除キ其居住ノ地ヘ向ケ發程セシ
 ム其郷里ニ至ルニ及ヒ自ラ此券狀ト並ニ罷役休暇ヲ受ケ
 タルヲ其管廳並區戸長ニ報スヘシ

第二十一條 恩金受領ノ始期ハ其券狀ヲ受ケタル日ヨリ始
 ムルヲ例トス然レモ其隊中若クハ陸軍病院ニ在テ發程遅

諸種
處置

延ニ及ヒタル日數ハ之ヲ申告シテ陸軍卿ノ處決ニ任スヘシ

第二十二條 其支給受領證書ノ方法ハ第六條以下ハ揭示シタル罷役給ニ異ナルコトナシ唯當該軍人死去セタルキハ券狀ヲ府縣駐在官長ニ還付スルノ外計算還納ヲ要スルコトナシ

第二十三條 其居住ヲ移ス者ハ亦第九條ノ方法ニ準ス若其手續ヲ歴スシテ移住スル者ハ再ヒ給與スルコトナシ

第二十四條 二箇年恩金ヲ受ケタル後ハ再ヒ後二ケ年ノ恩金ヲ給セス然レモ之カ爲ニ例年春秋兩度其管ノ鎮臺ヨリ特別ノ委員ヲ派出シテ當該ノ軍人ヲ覆檢セシムルヲ以テ此委員猶本人ノ本復ニ至ラサルヲ証明スル時ハ更ニ二年ノ恩金券狀ヲ受ケルコトヲ得

第二十五條 右委員巡廻ノ節其診斷ヲ受ケサル者ハ恩金ヲ停止スヘシ

此委員診斷ノ節本復ニ趨クテ以テ一旦券狀ヲ繳納スト雖モ其後疾病再發スルキハ更ニ之ヲ願フコトヲ得ヘシ

其再發委員巡廻ノ前ナルキハ巡廻ヲ待テ之ヲ願ヒ若其期遠キハ府縣駐在官曹長ニ就テ其查覈ヲ受テ之ヲ願ヒ猶事宜ヲ得サル者ハ管應ノ證書醫員ノ證書ヲ以テ之ヲ願ヘシ

第二十六條 當該ノ軍人其傷痰疾病重症ニ趨キ恩給ヲ給スヘキニ係ル者ハ更メテ恩給ヲ賜フ

罷役恩金ノ券狀ニテ受領シタル金額ハ恩給受領ノ日ヨリ返納スヘシ

第二十七條 凡テ軍人服役中ノ疾病公務ノ故ニ非ルモノニ由テ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩目ヲ盲スト雖モ恩給ヲ受ル

癩疾人ニ就テ特別ノ處置

ノ權利ナキ者ハ服役實期滿九年ニ至ラスト雖モ四季ノ扶助金ヲ給スルコトアリ其願書進達ハ上ニ揭示スル如ク証書ヲ副フヘシ

如此キ軍人ハ隊中ニ在リテ恩金ノ券狀ヲ待タズ直ニ該隊ノ簿籍中ヲ除キ其鄉里ニ向ケテ發程セシムヘシ

其鄉里ニ於テ之ニ許可セル特別扶助金ノ第一額ヲ支給スル爲ニ下令ノ寫帖ヲ受クヘシ

將官退職令

第一條 凡ソ將官ハ多年經久ノ疾病ニ因テ非職ヲモ辭スル者ニ非レハ退職ヲ命スルコトナシ

第二條 然レモ中將少將并ニ會計監督長軍醫總監ハ年齡ニ

因テ後備軍ノ軀員ニ轉スヘシ

第三條 其年齡ハ中將ハ六十二少將并ニ其相當ノ官ハ六十ヲ以テ定限トス

第四條 凡ソ後備軍ノ軀員ニ備ハル將官ハ戰時國內ノ司令ニ非レハ現役ニ服スルコトナシ

第五條 首帥若シハ偏裨ノ司令ニ任シ曾テ戰地ニ臨ミタル將官ハ後備軍ノ軀員ニ備ハル例ニアラスト雖モ其年齡六十五ニ至レハ亦是ニ轉ス但元老院議官ニ列シ或ハ他ノ兼官ニ任スル者ハ此限ニアラス

第六條 凡ソ將官後備軍ノ軀員ニ轉スルニ當リ退職ヲ請フ者ハ恩給ヲ賜フテ之ヲ誦ス

陸軍恩給令附錄

陸軍恩給令附錄

第一條 陸軍軍人恩給ヲ受ルノ權理ハ本令ニ掲載スルノ外
 コレナシト雖モ戰死或ハ公務ニ因テ死亡スル者父母或ハ
 幼少ノ弟妹ノニ在テ之ヲ養育スル親戚モナク飢渴ニ及フ
 へキモノ其府縣廳等所管ニ於テ查覈ノ上恩給令第六十九
 條ノ順序ヲ歷テ申告スルコトアラハ其次第柄ニ因リ臨時ノ
 詮議ヲ以テ相當ノ扶助料ヲ給スルコトアルヘシ
 但寡婦孤兒ノ内ニ扶助料ヲ受ルモノアルトキハ別ニ之
 ヲ給スルコトナシ

第二條 軍屬ハ恩給ヲ受ルノ權理ナシト雖モ戰地或ハ公務

ニ因テ傷痕ヲ受ケ又ハ死亡スルモハ其原由ニ因リ臨時ノ
 詮議ヲ以テ相當ノ扶助料ヲ給スルコトアルヘシ

第三條 軍人停年未滿ニシテ恩給並罷役俸罷役恤金ヲ受ケ
 サル者ハ當分従前ノ如ク文官一般ノ滿年賜金ヲ給ス但罷
 役俸罷役恤金ヲ受ルモノト雖モ滿年賜金ト比較シ其金高
 ノ多キ方ニ就テ給スヘシ

第四條 恩給並ニ罷役俸罷役恤金ヲ受ルモノト雖モ其軍人
 ノ籍ニ列セサルノ前文官ニ奉仕スル者ハ其年數ニ應ジ滿
 年賜金ハ別ニ給スヘシ

但明治八年(四月)第四十八號達武官傷痕扶助料概則ニ從
 ヒ終身扶助料ヲ受ケタル者又ハ明治二年ヨリ八年ニ至
 ル迄一等傷痕甲症ニ因リ終身一人半口ニ等傷痕乙症ニ
 因リ一人人口給與ノモノモ總テ本條ニ照シ處分スヘシ

第五條 本令發行ノ日ヨリ傷痍扶助及ヒ死亡ノ者祭葬家族扶助概則ハ廢止ニ屬スト雖ヒ發行以前傷痍死亡ニ因リ既

ニ扶助ヲ受ルモノハ從前ノ規則ニ從フヘシ

第六條 停年或ハ傷痍疾病ニ因リ恩給ヲ受ケタル者爾後再ヒ軍役ニ復シ又ハ文官ノ職ニ就クハ其時日間其恩給ヲ停止スヘシ依テ就職ノ者ハ拜命ノ都度其本籍ノ管轄廳ニ届出管轄廳ハ之ヲ内務省ヘ届出可シ

十一月十一日
第四百七十六號
第六條追加

陸軍武官恩給并扶助料

階級	恩給		扶助料	
	最上	最下	最上	最下
一等	千六百圓	千貳百圓	千九百貳十圓	千六百圓
二等	千四百圓	千〇五拾圓	千六百八十圓	千四百圓
三等	千圓	七百五拾圓	千貳百圓	千〇五拾圓
四等	八百圓	六百圓	九百六拾圓	八百圓
五等	六百七拾五圓	五百〇六圓	八百拾圓	六百七十五圓
六等	五百圓	三百七拾五圓	六百圓	五百圓
七等	三百七拾三圓	貳百八拾圓	四百十八圓	三百七十三圓
八等	二百六拾七圓	貳百圓	三百貳十圓	貳百六十七圓
九等	貳百拾四圓	百六拾圓	貳百五十七圓	貳百十四圓
十等	百七拾壹圓	百貳拾八圓	貳百〇五圓	百七拾壹圓
十一等	七拾九圓	六拾三圓	百〇三圓	七十九圓
十二等	七拾四圓	六拾圓	九拾六圓	七十四圓
十三等	六拾壹圓	四拾九圓	七拾九圓	六拾壹圓
諸卒	五拾五圓	四拾五圓	七拾貳圓	五拾五圓

服役停年ニ就テノ恩給

傷疾疾病ニ就テノ恩給

官 最上 最下 限 率

二十五年以上ノ服役各年及ヒ戰役ノ計算ヨリ生スル各年ニ當テノ増率

一 項 二 項 三 項 四 項

盲目或ハ二肢チ亡フル者 一肢チ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失フ者 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ之ヲ失ハスル之ニ等シキ傷疾疾病ニ就テ自己ノ但同上 朱書ハ服役各年ニ對シ此員數ヲ増率ス尤最上限ノ高チ超ルコトナシ

三項ニ比スルハ一層輕キ者ニシテ自己ノ用辨ニ差支ナキ者

下ノ恩給ニ對シテ一ノ恩給ニ對シテ

就テノ恩給

寡婦孤子扶助料

罷役後恩給

罷役俸

罷役恤金

一 項

三 項

四 項

甲

乙

肢ヲ亡シ或
二肢ノ用ヲ
フ者
但同上

一肢ノ用ヲ失
ヒ或ハ之ヲ失
ハスレ之ニ等
シキ傷痍疾病
但同上
朱書ハ服役各
年ニ對シ此員
數ヲ増率ス尤
最上限ノ高ヲ
超ルコトナシ

三項ニ比スル
ハ一層輕キ者
コソテ自己ノ
用辨ニ差支ナ
キ者

戰地或ハ公務
ニ因テ死シタ
ル軍人ノ寡婦
或ハ受クヘキ
權ヲ有シテ死
シタル軍人ノ
孤子
寡婦孤子

服役十五年以
上ノ者服役實
期ノ年數ニ乘
ノ者就役年間
ノ半ニ等シキ
年間ニ給ス
者ニ給ス
但滿九年以
上ノ者

疾病若シハ公
務中傷痍ヲ受
ケ一等休暇ヲ
得扶助ヲ仰ク
者ニ給ス
但滿九年以
上ノ者

六百圓

四百圓

百圓

日七十五圓

百圓

日七十三圓

百圓

日六十七圓

百十四圓

七十壹圓

十九圓

十四圓

拾壹圓

拾五圓

千貳百圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

千〇五十圓

八百圓

七百圓

五百圓

四百圓

四百圓

三百三十八圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

四百圓

三百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

四百圓

三百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

四百圓

三百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

四百圓

三百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

二百五十圓

甲第九拾壹號 十五年五月廿三日
恩給令ニ依リ扶助料ヲ受クルノ寡婦死没或ハ復籍ノ際孤兒
アルモノ該扶助料繼受ノ義ハ同令第九拾四條ニ倣ヒ死没或
ハ復籍ノ日ヨリ壹ケ年間ニ於テ出願セザルモノハ其權利消

絶ニ屬スヘシ候條此旨布達候事

但扶助料ヲ受ルノ孤兒死没或ハ年齡滿限等ニテ其次子ニ
移轉願入期限モ本文ニ同シ

○第十八款 諸兵郷里ニ於テ犯罪届出方

○乙第四拾八號 十五年五月八日

戸長役場

飯休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者郷里ニ於テ罪ヲ犯シ地
方裁判所ノ處分ヲ受ケタル者ハ其罪狀并ニ刑名及ヒ何年徵
兵何兵何番何年豫備軍氏名等詳記シ其都度可届出此旨相達
候事

○第九款 賞勳年金渡方手續概則

○乙第二拾號 十三年十一月二日

郡區役所
戸長役場

賞勳年金渡方手續概則中第八款左ノ通改正相成候條年金拜
受者ハ無洩告示可致此旨相達候事

年金渡方手續概則第八款改正

第八款 地方廳ニ於テ大藏省ノ達ヲ得ハ其金額ハ第六款ニ據リ同省ニ請求スヘシ尤金額付與ノ期月ニ至リ未タ回金アラサルハ豫備金ヲ以テ繰替本人ニ下付スルヲ得

○乙第九十三号

十三年五月五日

郡區役所

年金渡方手續概則別紙ノ通追加相成候條勳等年金拜受者ニ可致告示此旨相達候事

(別紙)

年金渡方手續概則追加

第十款 年金受領ノ本人死去スル時ハ其死去ノ日一月以降六月マデニ在ルモノハ上半ケ年分七月以降十二月マデニ在ルモノハ下半ケ年分ヲ給スヘシ但其年金票ハ最終ノ下付金ヲ給スル時地方廳ニ之ヲ收シ地方廳ヨリ賞勳局ニ

還納スヘシ賞勳局ハ之レヲ大藏省ニ通牒スヘシ

第十一款 勳等年金拜受ノ者事故アリ姓名ヲ改メシキハ本籍戶長ノ與印アル届書ヲ本人所有年金証ニ添へ現受取場所ノ地方廳ニ出スヘシ地方廳ニ於テハ之ヲ認可シ該年金証ノ裏面ニ何年何月何日改姓名セシヲ簡明ニ記入シ長官之ニ名印シテ本人ニ却付ス而後地方廳ハ其事用ヲ賞勳局及大藏省ニ届出ヘシ

但年金拜受以來ノ改姓名ニ係ル者ハ都テ此手續ニ據ルモノトス

第十二款 勳等年金拜受ノ者水火災或ハ盜難ニ罹リ又ハ遺失等ニテ所有年金證紛失ニ及フコトアラハ即時ニ該証ノ寫全文其寫シテ所持ナキ者ハ何號何額ノ年金證如何ナル事由ニ依テ紛失ニ及ヒタル次第ヲ詳記シ代リ年金証請求

方チ年金受取場所ノ地方廳へ願出ツベシ地方廳ニ於テ右ノ願書ヲ受取ルルハ其旨賞勳局へ申請シ且同時ニ紛失ノ旨大藏省へ届出ツベシ然ルルハ賞勳局ニ於テ前証ニ代ユベキ新証ヲ作り該地方廳ヲ經テ本人へ付與セシムベシ尤新証ヲ付與セサル間ハ本人ノ年金渡方ヲ停止ス仍テ其間ニ相渡スベキ年金ハ新証ヲ付與シタル次ノ拂渡期月ニ一同之ヲ相渡スベシ

但本文紛失ノ年金証ハ發覺次第本人ヨリ其管轄廳へ差出該廳ヨリ之ヲ賞勳局へ差出スベシ

○乙第九拾四號 五月七日

郡區役所

明治十年以後同十二年以前徵兵適齡ニシテ改正徵兵令發令以後本年四月十日迄ニ名稱ヲ罷メタル者取調方ノ儀本年乙第九拾壹號ヲ以相達置候ニ就テハ調査上脱漏等ノ儀ハ無之

管ニ候得共萬一調洩ノ者有之候テハ不相濟義ニ付精密取

調他日不都合無之様注意可致此旨更ニ相達候事

○第貳拾款 軍隊手帖割符、免狀運送費

○乙第貳號 十五年一月九日

郡區役所
戶長役場

軍隊手帖番號割符或ハ通行免狀等豫備後備軍ノ者へ下付又ハ引揚ニ付郡區役所又ハ戶長役場ニ於テ要スル郵便或ハ通運費毎月末請求書調製當縣庶務課へ可差出此旨相達候事但本人ノ疎漏ニ依リ遺失等ニテ更ニ下渡ヲ出願候費用ハ此限ニ非ス

○乙第拾號 十五年一月廿七日

全

軍隊手帳運送費ノ義本年乙第二号ヲ以テ及達置候處豫備後備或ハ歸休兵ノ内住所僻地ニシテ遞送ノ便無之或ハ事急ニシテ別仕立飛脚ヲ要スル節右人足賃前同号同様ノ手續ニ係

ル者ハ前同号同様ニ請求書可差出儀ト可心得此旨相達候事

○第貳拾壹款 從軍有功者處刑ヲ受者賞譽止

○乙第六号十三年一月十七日 郡區役所

陸軍ニ從事シ西南ノ役ニ於テ功勞アル者ハ追々相當御賞
譽可相成ノ處右ハ凱施ノ後軍律將校ハ降官以上下士ハ降等
以上兵卒ハ皆以上ノ刑ヲ被リタル者及國事犯又ハ除族并徵
役實決ノ刑ニ該ル歟或ハ舊惡滅免贖罪收贖セラルト雖モ
其罪被廉耻甚ニ係ル等ノ罪ヲ犯シ司法衙門ノ處分ヲ受ケ
ル者ハ一切賞譽不相成候就テハ追々傳達方其役所ニ相達
候節ハ傳達ノ以前詳細取調若右刑ヲ被リタル者有之キハ其
旨詳記返納可致此旨相達候事

○第二十二款 海軍下士以下身元異動届方

○乙第四百七拾七號十一年十一月十一日 各區々戶長

海軍省所轄下士以下移籍改名及婚姻相續養子離縁復籍分家
或ハ他府縣ニ寄留生死等ヲ始メ都而戶籍上變換ノ節ハ其都
度可届出筈ノ處往々等閑ニ附シ年月ヲ經テ届出候向モ有之
兵籍上不都合不抄候條自今右等ノ節ハ其都度無遺漏區戶長
調印(養子送籍全離縁復籍等ハ發賣兩家ノ届書ニ)上可差出此旨相達候事
但本文届書ハ海軍々務局宛ニシテ三通當縣ニ可差出且届
出方及遷延候向ハ爾來届出候年月ヨリ起算扶助金支給候
儀ト可相心得事

○第二十三款 海軍下士以下歸省休暇規則

○甲第五拾二号十二年三月廿七日

海軍下士以下勤仕年限中父母疾病其他何様ノ事故アルモ歸
省差許サ、ル成規ニ候處自今左ノ通被相定候條此旨布達候事
一自今海軍下士ノ勤仕年期ヲ解キ一等卒以下職務搭別勉勵

ノ者ハ其勤仕年數ニ因リ幾週日ノ休暇歸省ヲ許スベシ
 一 下士依願歸省開屆又ハ一等卒以下定則ノ休暇歸省差許シ
 候者若シ事故アリ更ニ延期出願候節ハ最初賜暇ノ滿期翌
 日ヨリ追テ郷里出立ノ前日マテ家族扶助金差止メ隨テ勤
 務日數中ニ算入致サザルベシ
 但一等卒以下萬一父母老疾家ニ侍養ノ子孫ナキ等不得
 止ノ事故ヲ以歸省差許候モノモ本文同様相心得ベシ
 一 一等卒以下其勤仕年數ニ因リ休暇歸省ヲ許ス者ニハ往返
 旅費一日行程十里誥ヲ以金六拾六錢五厘ツ、ヲ給スベシ
 一 前項ノ旅費販省出發ノ際ハ往片道分ノミヲ給スベシ故ニ
 販艦販營ノ旅費ハ本人乘組艦船長又ハ屯在營長ノ依頼ア
 ルキハ郷里出發ノ際一時當縣ニ於テ繰替相渡スベシ
 ○第二十四款 海軍一等卒以下兵役中一切免役許サス

○乙第二百四十六号 十三年十二月廿五日

郡區役所 戶長役場

海軍一等卒以下兵役中ノ者養子ニ貫ヒ請ケ隨テ養父母病氣
 或ハ家事困難等ノ事故ヲ以テ免役願出候向モ有之候得共渾
 テ不及詮議義ニ候條此旨相達候事

○第四條 社 寺

○第一款 社寺創立再興復舊公稱願方

○甲第百八拾八号 十二年十二月廿七日

社寺創立再興復舊公稱願出ノ節ハ永續方法書及別紙書式

ニ照準明細書相添差出スベシ此旨布達候事

(別紙)

朱 (社寺明細書々式)

何國何郡(町村)何番地字何

某 神社

朱 (何宗何派)

某 寺

某 寺

一祭神 本尊

一由緒 朱(創立廢合等ノ年月并該社寺ニ關スル緣由沿革ヲ詳記スベシ)

一(社堂)間數 朱(其他ノ建物アレハ并ニ舉クベシ)

一境内坪數 朱(地種及名受人ノ姓名私有ノ別ヲモ記スベシ)

一境内(神社佛堂)幾宇

某(社堂)

(祭神本尊)

由緒

建物

一境外所有地

(耕宅)地反別

何(町村)何番地字何

地價金額

山林反別

何(町村)何番地字何

地價金額

一(氏子戸數檀徒人員)

朱(氏子檀徒無之向ハ信徒人員ヲ記スベシ)

一縣廳迄ノ距離里數

以上

○第二款 私邸自祭神祠佛堂參拜停止

○甲第六號 十一月八日

從來人民私邸内等ニ自祭スル神祠佛堂へ衆庶參拜爲致候向
モ有之自然一般社寺同様ノ姿ニ相成不都合ニ付自今総テ參
拜停止候尤其建物等更ニ信向人共有ノ筋ヲ以尙參拜爲致度
者ハ永續方法并神官僧侶ノ受持等詳悉取調可願出旨教部省
ヨリ達有之候條此旨布達候事

但從前願濟ノ分ト雖モ建物等一己私有ニ属スル向ハ本文
同様タルヘシ

○第三款 社寺建築修繕

○乙第二百九拾號 十一月 十一月
六月廿六日

社寺建物ノ儀ハ建築修繕取毀ヲ共其時々出願ノ上訴可キ受
シヘキ筈ニ付心得違ヲ以無其儀着手候儀無之様可致此旨相
達候事

但建築修繕等ノ節ハ仕様目論見帳并ニ建物圖面相添藤出
金方法ヲモ詳記シ可差出事

○第四款 社寺明細帳

○甲第百十五号 十二年七月廿三日

今回取調ノ筋有之縣社以下神社寺院明細帳別紙書式ニ照準
精密取調且境外遙拜所招魂社祖靈社明細帳ヲモ調製本年六
月三十日ノ現況ヲ以テ來ル八月三十一日限リ可差出此旨布
達候事

(神社明細帳書式)

何國何(郡區)何(町村)何番地字何

(縣鄉村)社或ハ無格社

某 社

一 祭神

一 由緒

一 社殿間敷

一 境内坪數并地種

一 境内神社幾社

某神社

祭神

由緒

建物

一 境内某遙拜所

由緒

建物	境内招魂社
由緒	
建物	
境内祖靈社	
由緒	
建物	
共有人員	
一 境内所有地	
耕地段別	何(町村)何番地字何
地價金額	
山林段別	何(町村)何番地字何
地價金額	

宅地段別	何(町村)何番地字何
地價金額	
一 氏子戸數	
一 縣廳迄ノ距離里數	
右ノ通相違無御座候也	
何國何(郡區)何(町村)	
何神社祠官掌	
宗何派何寺院何職	
職名	姓名印
右神社氏子或ハ崇敬人	
寺院檀宗信徒或ハ法類	
惣代	
姓	姓名印
姓	姓名印
姓	姓名印
右(町村)戸長	
姓名印	

(寺院明細帳書式)

何國何(郡區)何(町村)何番地字何

總本山或ハ本寺又ハ某寺末

某 寺

何宗何派

一本尊

一由緒

一堂宇間數

一境內坪數并地種

一境內佛堂幾宇

某堂

本尊

由緒

建物

一境內庵室幾宇

某庵

本尊

由緒

建物

一境外所有地

耕地段別

何(町村)何番地字何

地價金額

山林段別

何(町村)何番地字何

地價金額

宅地段別

何(町村)何番地字何

地價金額

一檀徒人員

一縣廳迄ノ距離里數

右ノ通相違無御座候也

(以下認方前ニ準ス)

(境外遙拜所明細帳書式)

何國何(郡區)何(町村)何番地字何

某神社遙拜所

一由緒

一建物間數

一(境内敷地)坪數并地種

一信徒人員

右ノ通相違無御座候也

(以下認方前ニ準ス)

(境外招魂社明細帳書式)

何國何(郡區)何(町村)何番地字何

招魂社

一由緒

一建物

一共有人員

右ノ通相違無御座候也

(以下認方前ニ準ス)

(境外祖靈社明細帳書式)

何國何(郡區)何(町村)何番地字何

祖靈社

一由緒

一建物間數

一(境内敷地)坪數并地種

一 共有人員

右ノ通相違無御座候也

(以下認方前ニ準ス)

明細帳取調方心得

一 用紙ハ美濃紙ヲ用ヒ一社寺毎ニ各紙ニ相認ムヘシ

但攝末社ノ名義ヲ問ハス神社境外ニ在ル者ハ總テ一社

トシ各紙ニ認ムヘシ

一 山野路傍在置ノ神祠并衆庶參拜ヲ許可セシ人民私邸内ノ

神祠ハ一社トシ取調フヘシ

一 遙拜所招魂社祖靈社并寺院ノ別院支坊末庵等ハ公許共有

ニ係ル者ノミヲ取調フヘシ

但建物無之遙拜所ハ記載ニ及ハス

一 由緒ハ創立公稱廢合再興復舊移轉及ヒ社格等許可ノ年月

并該社寺ニ關スル緣由沿革ヲ詳記スヘシ

一 社寺境内地ノ社寺名受ニ非ル者ハ名受人ノ姓名私有共有

ノ別ヲ地種ノ下ニ登記スヘシ

一 社寺境内ニ社堂外ノ建物(敎院ノ類)アラハ社堂間敷ノ次ニ

並ニ舉シヘシ

一 祭神由緒不詳ト雖モ古老ノ口碑等ニ存スル者ハ其旨ヲ記

シ境内遙拜所等無之者ハ其項ヲ除クヘシ

一 社寺ニ氏子檀徒無之向ハ信徒(講中ノ類)ノ人員ヲ記スヘシ

○乙第九拾二号 十七年七月廿三日

郡區役所

本年甲第百拾五号布達ニ依リ明細帳差出候上ハ一應郡區役所ニ於テ遂調査來ル九月十五日限リ取纏メ可差出右明細帳ハ神社寺院境外遙拜所招魂社祖靈社ノ五種ニ分テ神社寺院

ハ每郡區各冊ニ編製シ表紙ニ何國何郡區(神社寺院)明細帳ト
署記ス一冊内ハ町村ヲ以テ次叙シ同町村内ノ神社ハ社格寺
院ハ宗派ヲ以テ區別シ且冊首ニ町村各目錄ヲ附スベシ境外
遙拜所以下ハ各別冊ニ編製シ表紙ノ署記并目錄ハ前ニ準ス
ヘシ此旨相達候事

○第五款 社寺惣代人

○甲第四百四拾貳號 十四年 八月十九日

社寺(官國幣社)惣代人ノ義氏子檀家中(氏子檀家トキモノハ信徒)相應ノ財産ヲ
有シ衆望ノ歸スル者三名以上相撰ミ戸長役場ニ届出今後該
社寺ノ願届等ハ海ヲ連署ヲ以テ可差出且社寺収入財産(畑田
山林ノ所得ハ勿論賽物祈禱費儀)其共有ニ属スヘキモノト其神官住職
ニ付スルモノトノ豫納每社寺適宜相定平素混亂セサル様取
調置可申此旨布達候事

但十年(八月)甲第三百三拾三號布達自今相廢候事

○第六款 社寺寶物古文書保獲

○甲第七拾九號 十二年 六月四日

社寺寶物古文書等ノ儀ハ平素注意シ厚ク保護可致等ニ有之
就テハ縣社以下(無格社ヲ除ク)神社并ニ寺院共所藏ノ寶物古器物
古文書等別紙書式ニ照準目錄帳取調來ル七月三十一日限リ
正副二通可差出此旨布達候事

(別紙)

書式

某(神社寺院)寶物古器物古文書目錄

一 緣起書

幾 卷

撰者及ヒ筆者ノ姓名并ニ其年月ヲ配ス

一 文書

幾 通

百年以上若クハ名家ノ筆ニ係ルモノニテ文書ト稱スヘキ者ハ一々其目ヲ掲ケ撰者筆者年月寄附人并傳來ノ所由ヲ記ス(以下扁額ニ至ルマテ記載方皆之ニ準ス)

一書畫 或ハ繪卷物 幾 幅 或ハ幾卷

絹地紙地形色墨畫等ノ別ヲ記シ繪祠等記載方都テ前ニ準ス

一寫本 或ハ寫經 幾 本

格別貴重ナルモノハ行數紙數等ヲモ詳細ニ記載スヘシ

一扁額 一 面

寸法ヲモ記ス

一棟札 一 枚

年月及ヒ人名ヲ記ス

一鏡 一 面

銘(若クハ無銘)寸法形鑄文重量年月寄附人傳來ノ所由等ヲ記ス(已下記載方皆之ニ準ス)

一鈴 一 箇

一劍 一 口

燒刃裝具ノ地金模様(銘アラハ銘)等ヲモ記ス

一古金 一 枚

一古錢 一 枚

一古印 一 顆

印文鈕形等ヲモ記ス

一甲冑 一 副

札威シ毛等ヲモ記ス

一琴 一 張

一笛 一 管

此他古書籍(百年以上若クハ名家ノ筆ニ係ルモノ)古法帖(明朝摺以上ニ係ルモノ)武器文具樂器珠玉石釵等ニ至ル迄各部ヲ分ク類ヲ推シ書式ニ照ラシテ記載スヘシ且其金銀銅器ニ係ルモノハ其重量等詳細ニ記センヲ要ス
右之通御座候也

年 月 日

兵庫縣管下

何國何(郡區)何(町村)

何神社祠官掌
宗派何寺院住職

職名 姓 名印

右神社氏子或ハ崇敬人
寺院檀家信徒或ハ法類總代

姓 名印

姓 名印

右(町村)戸長

姓 名印

○甲第八拾號 十二年六月三日

大社古社〔官國幣社外〕並ニ名山巨刹等ニ設置有之文庫經藏及ヒ
儲書等別紙書式ニ照準詳細取調來ル七月三十一日限り正副
二通可差出此旨布達候事

明治十二年(六月)甲第八拾號布達別紙

書式

何國何(郡區)何(町村)

縣鄉村社又ハ無格社
何宗何派

何 寺 神社

何々文庫 或ハ何々經藏

稱號ナケレハ直ニニ文庫書庫又ハ經藏ト書ス文庫并經

藏等無ケレハ直チニ儲書ヲ記載ス

位置

設置ノ地境外ニシテ(郡區)町村ヲ異ニスレハ境外何(郡區)何(町村)ト書シ境内ナレハ本(宮社)又ハ本(寺院)境内ト記ス
幅員

豎幾間 幾尺 横幾間 此坪幾坪 幾合幾夕ト記ス

創立

年號月日及ヒ設立人ノ姓名 履歷 設立ノ原由 等其他緊要ノ事情ヲ記載ス 其傳記ヲ失フモノハ設立年度及ヒ原由不詳ト書シ 凡何年度ノ創立ニ係ル由ノ考案ヲ附ス

儲書

內國書

皇國ノ著述編輯ニ係ルモノヲ云漢籍ノ註疏佛經ノ解釋

歐書ノ翻譯ト雖ヒ皇國人ノ註釋和解ニ係ルモノハ皆此部ニ收ム

版本

幾部 此冊數幾本

內國人手蹟ノ法帖類等皆此部ニ收ム

寫本

幾部 此冊數幾本

其書名人名年月等ヲ記ス(以下文書書畫寫經等内外國人ヲ論セス皆之ニ准ス)

文書

幾種 又ハ幾枚

種類多キ者ハ其類ヲ分チ何々幾卷何々幾枚ト記ス但シ本年甲第七十九號古文書中ニ掲ケタルモノハ記載ニ及ハズ以下準之

書畫

幾種

內國人ノ筆ニ係ル書圖繪卷物書畫幅ノ類皆此部ニ收ム
外國書

漢籍佛經歐書其他一切外國ノ著述編輯ニ係ルモノハ皆此部ニ收ム

版本

幾部 此冊數幾本

內國出版ノモノト雖モ其著述編輯外國人ノ手ニ成ルモノ及ヒ法帖類等皆此部ニ收ム

寫本

幾部 此冊數幾本

內

內國人寫本

幾部幾本

外國人寫本

幾部幾本

古寫經ノ類皆此部ニ收ム

書畫

幾種

外國人ノ筆ニ係ル書圖書帖ノ類皆此部ニ收ム

總計

內外版本
內外寫本
內外書畫
內國古文書
右之通御座候也
年月日

幾部幾本
幾部幾本
幾種
幾種

兵庫縣管下

何國何(郡區)何(町村)
(寺院ハ神社祠官祠掌
何宗派)何寺院住職

職名 姓名 姓名 姓名 姓名 姓名 姓名 姓名

右神社氏子或ハ崇敬人
寺院檀家信徒或ハ法類物代

姓名 姓名 姓名 姓名 姓名 姓名 姓名 姓名

右(町村)戸長

姓名印

○第七款 寺院借財及寶物抵當

○甲第八號 十一月八日

寺院修繕其他寺用ノ爲メ一時不得止借財候者有之節地所(除
稅地ヲ除クノ外)建物及寄附物寺附什器等抵當ニ書入候向ハ
法類檀家協議ノ上檀家貳名以上連署各本寺法類等ノ承認ヲ
受ケ本寺ニ於テ右様ノ儀有之節ハ渾テ此手續ニ隨ヒ同宗内
ニテ重立候者二名以上ノ承認ヲ受クヘシ決メテ僧徒一己ノ
私借ト混淆無之様可致旨教部省ヨリ達有之候條此旨寺院へ
布達候也

○甲第百二十五號 十二年八月一日

本年(六月)甲第七拾九號ヲ以テ社寺寶物古文書保護ノ儀布達

十二年十月廿五日
十月廿五日
十月廿五日
十月廿五日
十月廿五日
十月廿五日
十月廿五日
十月廿五日
十月廿五日
十月廿五日

候ニ付テハ今般調製スベキ目錄帳中へ記載ノ物品ハ明治十
年第四十三號公布ノ通抵當ト爲スベカラザル筋ニ有之仍テ
自今社寺ニ於テスル抵當ハ氏子檀家協議ノ上神官住職連署
ヲ以テ可願出此旨布達候事

但目錄帳へ記載セズト雖ヒ該社寺ニ別段ノ由緒アル地所
建物等ハ寶物古文書ニ准スベク且社寺ノ物件不得己義有
之處分候節ハ明治六年第二百四十九號公布ノ通心得ベシ

○太政官第二百四十九號公布 六月十七日

神社佛寺共古來所傳ノ什物衆庶寄附ノ諸器并ニ祠堂金等ノ
類ハ神官僧侶ハ勿論氏子檀家ノ者ヲリヒ自儘ニ處分可致筋
無之候條若不得已儀有之候ハ、委詳具狀ヲ以テ教部省へ可
申立事

○太政官第四十三號 十年五月十六日 抽出

神社寺院ノ爲メ抵當ヲ以テ金穀借入ノ節ハ必ス氏子檀家二名以上ノ連署ヲ要ス此連署ナキモノハ神官僧侶ノ私債トス云々

○第八款 社寺境内地

○乙第百貳拾七號

十一年三月廿七日

區 戸 長

官有ノ社寺境内地ニ於テ神官住職在職中奉務ノ爲メ居住スル家屋ノ外別ニ隱室等取設(候ハ、有之、分、自今毎月相當ノ借地料徴收候條(新規築造ノ節ハ)建坪繪圖面等ヲ詳記シ借地可願出旨神官住職ノ者へ無洩告示スヘク此旨相達候事但(從來設置有隱室等ハ)借地料ハ四月一日ヨリ徴収候條(本文ニ準シ更ニ願書爲差出)同月十五日限り毎區取纏メ可差出候事

○乙第三百六拾貳號

十一年八月十日

擬第(壹貳)區々戸長

十五年三月廿七日乙第百二十七號内ノ文字ナリ除クニ改正

昨明治十年十一月中丙第百四拾壹號ヲ以テ辻店營業場所取極メ及布達置候處右場所ノ中社寺境内ニ於テ營業セントスルモノハ其社寺ヨリ差支無之証ヲ取り其証ヲ添ヘテ所轄ノ分署へ可願出様營業人共へ可相達此旨相達候事

○乙第四百五拾八號

十一年十月廿四日

全上

辻店營業ノ儀ニ付客歲丙第百四拾壹號本年丙第百四拾三號布達ノ趣モ候處右ケ所ノ中官有地社寺境内於テ平素取設候茶店休息所等ノ如キハ客歲甲第百六号本年甲第百六拾八號布達ニ照準借地可願出筋ニ付辻店營業ト混同セサル様可致爲心得此旨相達候事

○第九款 祠官掌撰舉及身分進退等

○甲第百二十四号

十一年七月廿一日

縣社以下祠官掌撰舉ノ義ハ是迄區々ニ相成居候處今後必ス

該社氏子ノ歸依ニ任セ本籍寄留ノ者ヲ不論投票ヲ以テ可願
出尤投票人ハ不動産所有ニシテ本籍アル者ニ限リ候條此旨
布達候事

○乙第三百二十六号 十三年七月卅一日

本年當縣甲第百貳拾四號ヲ以テ縣社以下祠官祠掌撰舉ノ儀
布達候ニ付テハ該投票取纏メ進達可致此旨相達候事

○甲第百三拾二號 十三年八月十九日

明治十年(七月)當縣甲第百廿四號布達祠官祠掌撰舉ノ節投票
ノ義ハ向後該神社又ハ役場ニ於テ氏子(無氏子ノ向ハ信徒)總代三
名以上及戶長立會ノ上右總代人ニ於テ開披多票人名并ニ其
票數ヲ揭載別紙書式ニ倣ヒ當撰人履歷書相添可願出此旨布
達候事

但本文投票ノ義ハ何時可取調義モ有之ニ付該神社ニ取纏

置可申事

(別紙)

某(府縣)某郡某(町村)何番地(華士族平民)何某(長二男附籍)

教導職名 苗 字 名

何年何月生

一何年何月幾日某國某郡某(町村)何神社何々拜命

一何年何月幾日某國某郡某(町村)何神社何々へ轉任

一同上依願免職

一何年何月幾日教導職試補拜命

一何年何月幾日(訓導講義)拜命

(戊辰以後ノ履歷ヲ記ス可シ)

實印

小印

右之通候也

年 月 日

何 某印

○甲第三号 十一月十六日

縣社以下祠官掌辭表差出候節添書ノ儀是迄區々ニ相成居候處今後必ス氏子惣代二名以上及區戶長添書ヲ以テ可願出此旨布達候事

○甲第七十二号 十一月十七日

府縣社以下祠官祠掌ノ等級ヲ廢シ身分取扱ハ一寺住職同様タルヘシ旨公達有之候條此旨布達候事

○甲第七拾五号 十一月廿六日

縣社以下祠官祠掌進退ノ節辭令書授與ノ儀自今相廢シ候條此旨布達候事

但撰舉方ノ儀ハ渾テ從前之通相心得願書正副二通可差出

事

○第十款 神官教導職兼補ヲ廢シ非儀關セス

○甲第三十八号 十一月十三日

左ノ通被達候條此旨布達候事

○乙第七号

府 縣

自今神官ハ教導職兼補ヲ廢シ非儀ニ關係セサルモノトス此旨相達候事

但府縣社以下神官ハ當分從前ノ通

明治十五年一月廿四日 內務卿山田顯義

○第十一款 神興供奉者帶刀

○丙第拾三號 十一月十五日

官國幣社神興渡御ノ節供奉ノ者從前甲冑又ハ大紋素袍等若用帶刀致シ來候向ハ供奉中ニ限リ一社ノ古例ニ任セ帶刀不

苦筭ニ付自今縣社以下モ同様專ラ古代ノ裝飾ニ摸倣シ神輿
ニ供奉致シ來候舊例有之向ハ其人員ノニ供奉中ニ限リ帶刀
不苦尤其都度本廳及ヒ最寄警察分署へモ可届出此旨祠官祠
掌へ布達候事

但普通祭服着用ノ者帶刀不相成儀ハ勿論ナルベシ

○第十二款 町村分合等氏子去就届方

○甲第九拾貳號十五年五月廿三日

各町村鎮座氏神ノ儀ハ其土地ニ就キ從來一定ノ區域有之義
ニ付各自ノ信否ニ任セ候ニ去就スヘキモノニ無之候條町村
分合等ヨリ不得止場合有之甲社ノ氏子一部落擧テ乙社ノ氏
子ト相成節ハ甲乙社神官氏子協議ノ上双方進署可届出此旨
布達候事

○第十三款 神佛祭事神輿屋臺檀尻等差出方

○甲第九十七號十四年十二月廿一日

神祭ノ節神輿其他差出方ノ義ニ付明治十年十月(甲第九十六
三號ヲ以テ及布達置候處自今神佛祭事等ノ節神輿并屋臺檀
尻獅々頭練太鼓等差出サントスル者ハ所轄警察署又ハ分署
へ神輿ハ可届出其他ハ總テ可願出此旨布達候事

○第拾四款 寺院住職進退

○甲第八十四號十四年十一月十日

寺院住職進退出願ノ儀ニ付テハ是迄相達置候趣モ有之候處
區々相成居候ニ付今後撰擧ノ節ハ必ス該寺院檀家(檀家無之
向ハ崇敬人)總代二名以上及ヒ法類連署ノ上本寺本山添願書
并履歷書可差出尤本山代務トシテ觸頭或ハ教導職取締等ヨ
リ添書候トモ不苦候條此旨更ニ布達候事
但本人退職ノ節ハ檀家總代人ヲ始メ渾テ添書可差出事

○甲第百拾四號 十二年七月廿二日
寺院住職進退ノ節辭令書授與ノ義自今相廢シ候條此旨布達候事

但撰舉方ノ義ハ渾テ從前ノ通可心得事

○第十五款 轉宗改式離末本寺換

○甲第百十號 十一年七月六日

轉宗離檀ハ各自人民信仰ノ歸スル處ヨリ起ルモノニシテ決シテ抑制致問旨昨九年元教部省達書第二号ニ基キ相達置候處近來檀家去就恒ナク且葬儀取扱候者ニ於テモ往々體謀ヲ以テ自家へ勸誘スル等浮薄ノ所業ニ流レ候哉ニ相聞不都合不少候條今後教職ノ者ハ勿論一般人民ニ於テモ右様ノ所業無之様可致此旨布達候事

○甲第二十七號 十一年三月廿一日

舊教部省九年一月第二号達轉宗改式ノ節承認書授受ノ儀向後被廢候條渾テ壬申六月第百九十二号七年二月第十三号公布ノ通相心得自今轉宗改式ノ者ハ是迄葬儀受持ノ者へ通知及ヒ置其旨當縣へ可届出此旨布達候事

○丙第四號 十一年三月廿一日

離末本寺換ノ義是迄各寺ヨリ出願致シ來リ候處自今同宗派内ノ分ハ本末寺協議濟ノ上新舊本寺承諾ノ書而相添可届出此旨寺院へ布達候事

但他宗派へ附屬候向ハ從前ノ通タルヘシ

○第拾六款 御陵墓

○甲第百八拾貳號 十三年十二月七日

上世以來御陵墓所在未定ノ分即今取調中ニ付テハ古墳ト相見候地ハ人民私有地タリニ猥リニ發掘不致筈ニ候得共自然

風雨ノ爲メ石槨土器等露出シ又ハ開墾中不圖古墳ニ掘當リ候様次第有之候ハ、口碑流傳ノ有無ニ不拘凡テ詳細ナル給圖面ヲ製シ其地名并近傍ノ字等ヲ取調速ニ可申出旨其筋ヨリ達有之候條此旨布達候事

○乙第拾七號 十四年 二月一日

郡區役所
戶長役場

古來諸王ニテ奉祀ノ子孫無之方々(賜姓又ハ親王宣下ノ有無ニ拘ラス)墳墓ハ自今惣テ皇子御墓ニ準シ取扱相成候條該墳墓現存ノ向ハ地方傳說等詳細取調繪圖面相添可申出此旨相達候事

○第十七款 神官住職教導職名刺

○乙第百貳拾九號 十一年 三月廿九日

各區々戶長

今般取調ノ儀有之候條別紙書式ニ照準無遺漏區長ニ於テ取纏來ル五月一日迄ニ正副貳本可差出様祠官掌住職及ヒ教導

職ノ者ニ可相達此旨相達候事

但現今區戶長ヨリ神官及ヒ教導職兼務候向ニ別紙書式ニ倣ヒ可差出尤モ以後進退ノ節ハ右ニ照準其都度名簿可爲差出候事

朱(用紙美濃紙)

朱(別紙書式)

何府(縣)何國何郡何大小區何町(村)士族(平民)
何年何月何日何國何郡何大小區何町(村)縣(鄉)(村)社何神社(祠官)何寺(院)住職(誰)印
朱(現今)何年何月何日教導職何々拜命
何年何月何年何月何々月
或ハ未試補

朱(兼書式)

朱(豎四寸 横壹寸二分)

何府(縣)何國何郡何大小區何町(村)士族(平民)
何年何月何日何國何郡何大小區何町(村)縣(鄉)(村)社何神社(祠官)何寺(院)住職(誰)印
何年何月何日何國何郡何大小區
何年何月何日何國何郡何大小區

兵庫縣布達便覽上卷社寺ノ部

何町(村)縣(鄉)村(社)何神社(祠)官(祠)兼(於)拜命
朱(現今)何年何月何日教導職何々拜命

何年何月何年何ヶ月

朱同(上)

○乙第百貳拾四號十四年十一月十日

郡區役所

本年乙第九十号委任條款中神官及寺院僧尼進退之儀ハ別紙
縦形ニ照準員數表半年毎ニ取調翌一月七月兩度ニ可差出附
テハ右神官及寺院住職進退之儀今後毎月報告ニ不及候條此
旨相達候事

員數表取調方心得

- 一 神官及寺院住職他ヨリ兼務スル者ハ員數中ニ算入セス
- 一 神官及寺院住職其部外ヨリ轉住スル者ハ員數中ニ算入ス

一 一月ヨリ六月マテヲ前期トシ七月ヨリ十二月マテヲ後期

ト現數ハ六月三十日十二月三十一日ヲ以テ調査シ翌月
十五日限り差出ス

明治何年後期何郡神官進退員數表

社格	進		退		區別	縣	社	鄉	社	村	社	合	計
	祠官	祠掌	祠官	祠掌									

右取調候處相違無之候也

明治 年 月

何 郡 印

明治何年後期何郡寺院住職進退員數表

宗 區	進		退		合 計
	女	男	女	男	
天台					
眞言					
淨土					
臨濟					
曹洞					
黃檗					
眞					
日蓮					
時					
融通 念佛					
合 計					

右取調候處相違無之候也

明治 年 月

何 部 印

○第十八款 神宮大麻授受

○甲第三拾壹号

十一年
四月十二日

神宮大麻頒布ノ儀ニ付明治九年十一月本縣甲第百十五号布達ノ趣ニ候處有ハ自今廢止候條其受不ハ專ラ人民ノ自由ニ爲任候儀ト可相心得此旨布達候事

○第十九款 神官敬導職々獵不相成

○甲第五十三号十年

全文第一條第三十款ニ出ス

第五章 驛 遞

○ 第壹款 人馬繼立方章程

○ 乙第七十八號

十月廿日

各區々 戶長

非常出兵又ハ戍兵交番等ノ節人馬繼立方章程ノ義去六年三月太政官ヨリ被相定候分ハ勿論爾後改正ノ廉共其時々舊縣々ヨリ相達有之等ニ候得共尙又今般公達追加ノ次第モ候條該章程ヲ取捨シ全備ヲ要シ更ニ左ノ通相達候條若シ右章程中處分未定ノ儀モ候ハ、速ニ若手可致置且組合驛村及人馬賃錢調等己ニ届出有之分ト雖ヒ別紙雛形ニ照準シ至急取調區長ニ於テ取經メ來ル四月五日限當縣驛遞掛へ可届出此段相達候事

但賃錢ノ義ハ各所往還ノ險夷ト其驛村物價等ヲ酌量シ適實ニ豫定スヘキ事

- 一 非常出兵又ハ戍兵交番ノタメ人馬ノ差出繼立ハ每驛正副戸長ニテ取扱フ
- 一 人馬差出繼立及其勘定仕拂等ニ至ルマテ驛村戸長共篤ト協議シ其節ニ方テ不都合無之契約可致置事
- 一 每驛近傍村々ヲ適宜ニ割合之ヲ何驛組合村々トシ其驛内ノ人馬不足ノ分ヲ此組合村々ヨリ加助可爲致事
- 一 自他ノ管轄ヲ不論前後二三驛宛ニ組合驛ト定メ休泊ノ都合ニ因リ每驛之ヲ不繼立分爲致候節モ可有之事
- 一 先觸ハ陸軍省或ハ鎮台分營其外兵隊ヲ管掌スル長官ヨリ驛ノ正副戸長ニ當テ可差出候條最迅速ニ繼送候様豫備可致置事

但先觸ノ賃錢ハ至急可被相渡事

- 一 組合驛々ノ内ニ年番ヲ設ケ先觸到着次第其驛ヨリ管應ハ

人馬ノ員數ヲ以テ每驛加助人馬觸當狀ヲ可申請自然管應ニ懸隔ノ地等ニテ其間合無之節ハ直ニ組合村々ハ人馬可差出旨通置其段管應ニ相届更ニ觸當狀ヲ可申請事

但前以組合村々申合其節ニ當リ無差支様取極可置事

- 一 馬ヲ八足ニ換ヘ併セテ貳百人以上一時ニ候歟少數ニテモ一日ニ兩度ヲ過キ候歟或ハ二日ヨリ連日繼立ニ候ハ、其節官員出張致シ觸當并差操等指揮可致事
- 一 繼立ノ賃錢ハ各往還筋每地豫定ノ賃錢ヲ可拂若シ先觸ト同日ニ通行スルトキハ右賃錢ノ五割増相渡サルヘシ若シ先觸面ノ通人馬ヲ招集シ不用ニ及フ節ハ當日豫備人馬ノ現數ニ依リ右賃錢ノ半高相渡サルヘキニ付調書ヲ以テ其時々可受取事
- 一 火急ノ通行ニテ賃錢拂ノ間合無之節ハ其臺其營ヨリ人馬

數ニ應シ符札可被相渡ニ付其符札ヲ正副戸長ニテ取纏メ
 管廳ニ可差出事

一先觸ニ記載スル員數ノ外ハ假令一人一疋タリト決シテ此
 例ヲ以テ不可繼立若シ繼立度者有之候ハ、通運會社等平
 常ノ繼立ニ取計公課ノ分ト混淆不致様可取扱事

一驛并組合村々ノ都合ニ寄リテハ五十人内外ノ小繼立ハ通
 運會社等ニ爲請負候儀ハ不苦候得共必ス驛ノ正副戸長共
 立會繼立可致事

一非常警備ノ爲メ警視以下巡查派出候節モ右ニ照シ可取計
 事

一右ノ件々驛々戸長共聊タリト不正ノ所行有之歟村々戸長
 共觸當ノ人馬ヲ不差出様ノ不條理有之候ハ、嚴重咎可申
 付事

十年四月廿
日九第百三
十六号通達
加

(別紙雛形畧之)

一驛々繼立ノ費用ハ人馬賃錢ノ一割ヲ刎子之ヲ以テ可取賄
 事

○第二款 飛信遞送脚夫

○乙第三百壹號 十月十三日 區 戸 長

明治七年九月御發行飛信遞送規則第九項ニ途中脚夫足痛等
 ノ事ニ付テハ豫テ沿途ノ町村戸長ニ郵便取扱役ヨリ及協議
 次第モ可有之筈ニ候處戸長共於テ一般該規則ヲ熟知セサル
 ヲリ自然郵便取扱役ノ協議ニ疑惑ヲ生シ時機ニ際シ差支候
 旨今般内務省ヨリ被達候次第モ有之候ニ付爲心得別紙同規
 則第六項第九項相示候條右ノ旨趣篤ト熟記シ渡船場有之地
 ハ此旨渡守ノ者ニ豫テ相示置其時ニ方リ不都合無之様可取
 計此段相達候事

飛信遞送規則中

第六項 渡船場等ノ夜越無之地ハ兼テ其渡守及ヒ其地ノ戸長等へ約束致シ置其機ニ當リ差支無之様致置クヘシ

第九項 途中ニ於テ脚夫足痛等ノ變アリテ飛走致シ難キ時ハ沿道ノ町村戸長へ申入レ至急代リ脚夫ヲ出サセ繼立ヘキ旨脚夫へ申渡シ且兼テ沿途ノ戸長等へ其旨約束致シ置クヘシ

○甲第二拾三號 十二年 二月八日

勸業事務ニ付無稅ヲ以遞送配達相成候郵便物宛書ノ義本年郵便規則第四條第三拾五節ハ第四十壹節ニ通シ則勸農局長或ハ府縣長官名ヲ以テスルニ可限處或ハ其主任宛ニテ差出スモノ有之右ハ無稅郵便限外ノモノニ付人民ヨリ差立タルハ之ヲ差戻シ二倍稅ヲ可課答ニシテ爲ニ其要事ヲ缺キ候様

ノ不都合ヲ可生ニ付宜ク此分界ヲ正シ混淆セサル様可致爲念此旨布達候事

○第三款 郵便信書往復等一切ノ事

○甲第百三拾號 十三年 八月十九日

本年六月甲第八拾三號ヲ以テ郵便物ノ配達ヲ受タル節心得方ノ儀相達置候處詮議ノ次第有之取消候條自今左ノ通可相心得此旨更ニ布達候事

第壹條 郵便物ハ記載ノ本名ニ拘ハラヌ其肩書ノ名ヲ目的トシテ配達相成ニ付其肩書ノ役所又ハ其家ニ於テ之ヲ受取若シ其受取本名相違スル乎或ハ本名轉住等ノ節ハ其事由ヲ付箋ニ書記シ又ハ轉住ノ地名ヲ郵便物ニ書加ヘ郵便局若シハ郵便箱ニ可差出事

但本文ノ郵便物若シ先拂又ハ不足稅ナル時其肩書ノモ

ノニ於テ其税金ヲ拂フヲ欲セサル節ハ第二條ノ手續ニ依ルヘシ

第二條 先拂又ハ不足税ノ郵便物配達ヲ受タル者其税金ヲ拂フヲ欲セサル時ハ之ヲ受取ルニ及ハス然レモ之ヲ受取タル時ハ本名者ニ非ルモ之ヲ受取タル者ヨリ其税金ヲ拂フヘキ事

但民事詞詔ニ係ル裁判所ヨリノ呼出狀等ニシテ郵税先拂等ヲ以テ戸長役場ヲ經由スルモノアル時ハ役場ニ於テ其税金ハ拂ヒ置追テ差出元裁判所へ請求スヘキ事

○乙第三拾二號 十三年二月四日 郡區役所 戸長役場

郵便信書肩書不充分等ニテ配達差支候節配達人又ハ神戶郵便局出仕ノモノ郡區役所戸長役場等へ出向問合セ或ハ着否等附箋ヲ要スル儀モ可有之其場合ニ於テハ懇切應答可致像

メ此旨相達候事

○乙第百號 十三年五月廿五日 郡區役所

地方郵便ノ儀ハ地方官廳地方裁判廳又ハ兩廳ニ屬スル諸廳衙ノ間及ヒ右廳衙ト所管人民ノ間ニ往復スルモノニ限リ候處山林局神戶出張所等ニ宛タルモノモ亦開キ封帶封等ヲ以テスルノ向往々有之趣相聞へ不都合ニ候條自今注意可致此旨相達候事

○乙第四拾壹號 十四年四月一日 郡區役所 郵便取扱役

郵便規則中地方郵便ニ係ル諸免許鑑札ノ内木製ノ分ハ開封帶封ヲ以テ郵送シ得ヘキモノニ無之候條爲心得此旨相達候事

○乙第四拾貳號 十四年四月一日 郡區役所 戸長役場

府縣會又ハ府縣會議員ト府縣廳郡區役所戸長役場トノ間并

○府縣會ト府縣會議員トノ間及ヒ府縣會議員ノ間ニ開封帶封ヲ以テ往復スル公用郵便物ハ其府縣管内ヲ限リ地方郵便ノ規則ニ準シ送達方可取扱旨其筋ヨリ各郵便局ニ達相成候條爲心得此旨相達候事

○第四款 郵便取扱役喚徴ノコト

○丁第三拾二號 十四年八月十九日

郡役所

郵便事務ニ關スル用向或ハ違物等ノ義ニ付郵便取扱役ヲ呼出シ候向モ有之哉ニ相聞ヘ右ハ事務上差支ヲ生スルノミナラズ不都合ノ麻モ有之候條向後文書ヲ以テ往復致シ候様可取計此旨相達候事

○第五款 郵便御勘定表

○乙第二百五拾五號 十四年六月十四日

郵便取扱役

郵便御勘定表中誤字違算等驛遞局於テ朱書正誤シ爲心得下

十年四月三日
以勅定表第百
四十七號ヲ以
立勅定表第百
四十八號ヲ以
驛遞局於テ
誤字違算等
驛遞局於テ
朱書正誤シ
爲心得下

達候節是迄時々主掛ヨリ一々附箋シ來候處今後ハ無其儀掛印ヲ捺シ直ニ下渡候條粗漏ノ義無之様平素注意可致此段相達候事

○第六款 電信線傷害報知方

○乙第百廿壹號 十四年十一月八日

戶長役場

電信線傷害取締方ノ儀ニ付テハ兼テ公布ノ次第モ有之候得共不時毀損等有之節ハ迅速修繕可被取計等ニ付右等ノ場合ニ於テハ管内外ニ不關其最寄戶長ヨリ手近ノ電信分局ニ至急通牒可致此旨相達候事

○第七款 郵便取扱役職不相成

○甲第五十三號 十年

全文第一章第三十款ニ出

○第八款 郵便取扱役身元異働届

○乙 第四拾四號 十三年
二月十三日

郡役所

各部内郵便局取扱役ノモノ現今隠居或ハ子弟等ニシテ全ク
戸主ニアラサル向ハ別紙雛形ニ準テ該戸主ヨリ請書爲差出
本月二十九日限本應庶務課ニ可差出尤今後取扱役ニシテ前
同様ノ節ハ其都度爲差出本文ニ準テ可取計此旨相達候事
但本文ノ趣現今無之向ハ同日限庶務課ニ報告可致事
用紙證券界紙

證

今般私父隠居(或ハ長次男)誰ニ郵便取扱役被申付候ニ付テハ
本人勤務中萬一不都合ノ筋有之辨償等可致儀有之候ハ、本
人ハ勿論戸主ノ私資産ヲ竭テ辨償可仕依之証書差上置候也

何縣管下

何國何郡何村何番地

年號月日

何ノ誰印

驛遞局長

内務少輔前島密殿

行現
兵庫縣布達便覽上卷終

正 誤

○第一章第一條中

丁 數	行 數	誤	正
四丁	五行	其他ハ	其他
八丁	六行	番記ハ	番號
二十八丁	九行	「款」ノ下篤ヲ脱ス	
全	十行	持ハ	持
二十九丁	上層	決ハ	次
四十六丁	一行	「其」ノ下役ヲ脱ス	區長
五十二丁	一三ノ次	「道路橋梁及學校私立病院并ニ教育ニ係ル密附金願ノ事」ノ一項ヲ脱ス	
六十一丁	十一行	事務ハ	主務
七十一丁	全	賣却ハ	賣捌
七十三丁	六行	「某郡」ノ下區長ヲ脱ス	
百十一丁	十一行	「前」ノ下戸ヲ脱ス	
百十五丁	五行	備ハ	備

全

第五條次

〔十二年十二月十一日庶務課通達〕戸長役場ノ吏員撰舉規則被定候ニ付テハ保薦狀身元引受人文例左ノ通被定候條右ニ照準御取計可有之長官ノ旨ニ依リ此段及御通達候也」ノ七十四字ヲ脱

「刺」ノ下及上、縣、ヲ脱ス

學務ハ 學區 勿論ハ

廢ハ 獨 勿論

獨ハ 如左」ノ下略之ヲ脱ス

「第」ノ下、四、ヲ脱ス

〔十二年八月乙第二百十三号達改正〕ヲ脱

文字ハ十一丁二行上層ニ改ム

「拾」ノ下條、ヲ脱ス

「例」ノ下并諸兵旅費ノ六字ヲ脱ス

- 百十九丁 九行
- 百二十二丁 八行
- 百二十五丁 二行
- 百二十七丁 九行
- 百二十八丁 三行
- 百三十二丁 二行
- 第一章第二條中
- 十七丁 一行
- 二十四丁 十三行上層
- 第一章第三條中
- 十丁 十行上層
- 十二丁 四行
- 全 十行

- 十六丁 十三行
- 二十一丁 九行
- 二十二丁 四行
- 二十五丁 六行
- 二十六丁 一行
- 全 五行
- 全 十一行
- 二十九丁 七行
- 七十一丁 十三行
- 九十四丁 十二行
- 百六十六丁 十行
- 百七十一丁 十行
- 二百五十五丁 六行
- 二百五十六丁 十行
- 第一章第四條中
- 三十四丁 八行
- 三十八丁 五行

補隊々々ハ 補充隊

前月ハ 歩召

前ハ 金額ハ 全額

「省」ノ下通ハ衍字

後ハ 復

「軍」ノ下ハハ衍文「條」ノ下例ヲ脱ス

後備ハ 備役

再復ハ 再服

團ハ 團

○達及前後縦線ハ衍

電ハ 電

事用ハ 事由

「乙第九十四号達全文ハ衍字

「間」ノ下數、ヲ脱ス

條款ハ 條款

明治十五年四月十七日版權御願
明治十五年五月廿三日版權免許
明治十六年八月 日出 版

(定價金壹圓五拾錢)

編纂者

兵庫縣士族

相馬幸治

攝津國神戸區元町
三丁目七十八番邸

出版人

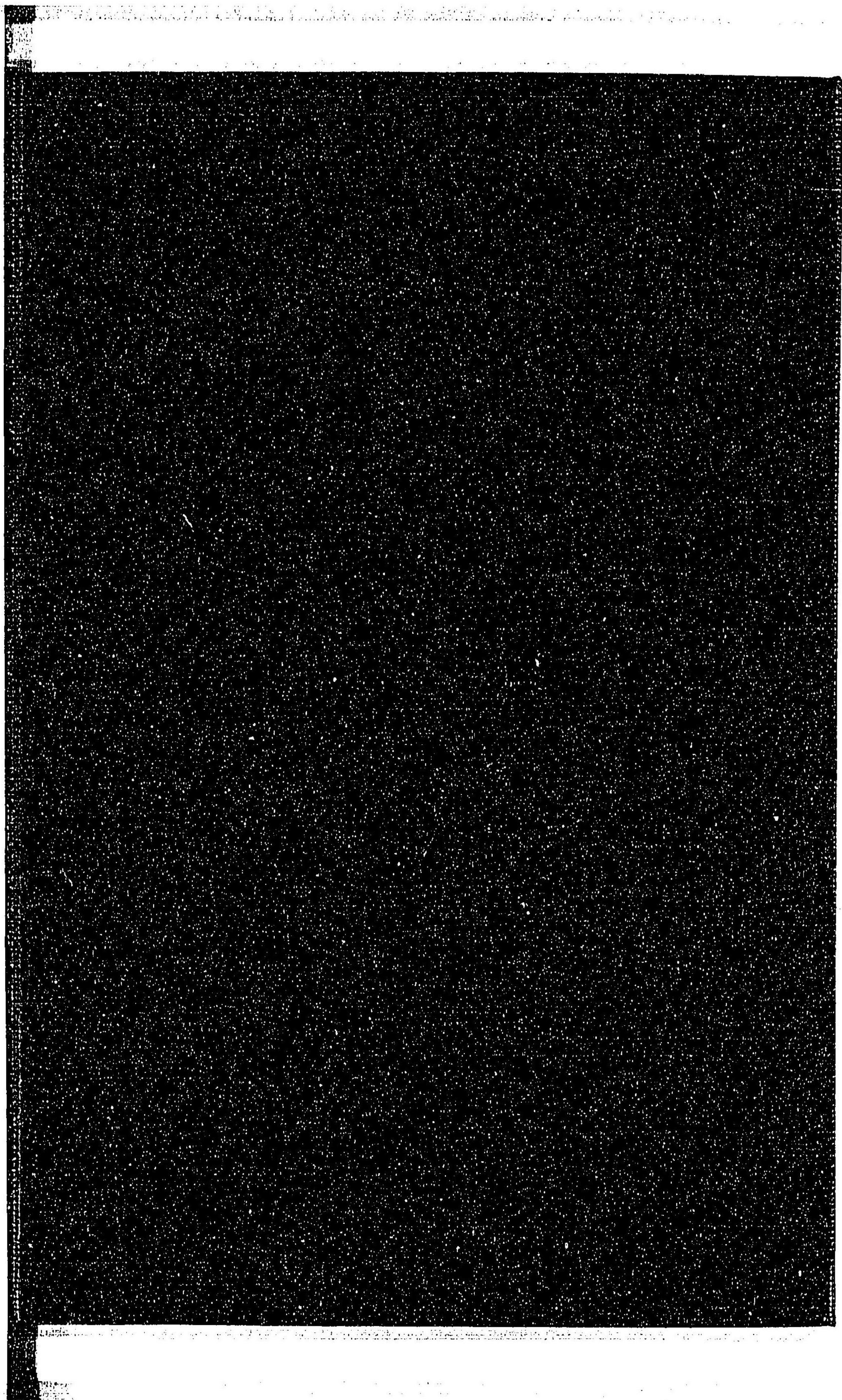
兵庫縣平民

小川保道

全國全區北長狹通
五丁目二十番邸

77+461





禁電子式複写

031281-001-3

CZ-1113-76-04

現行兵庫県布達便覧

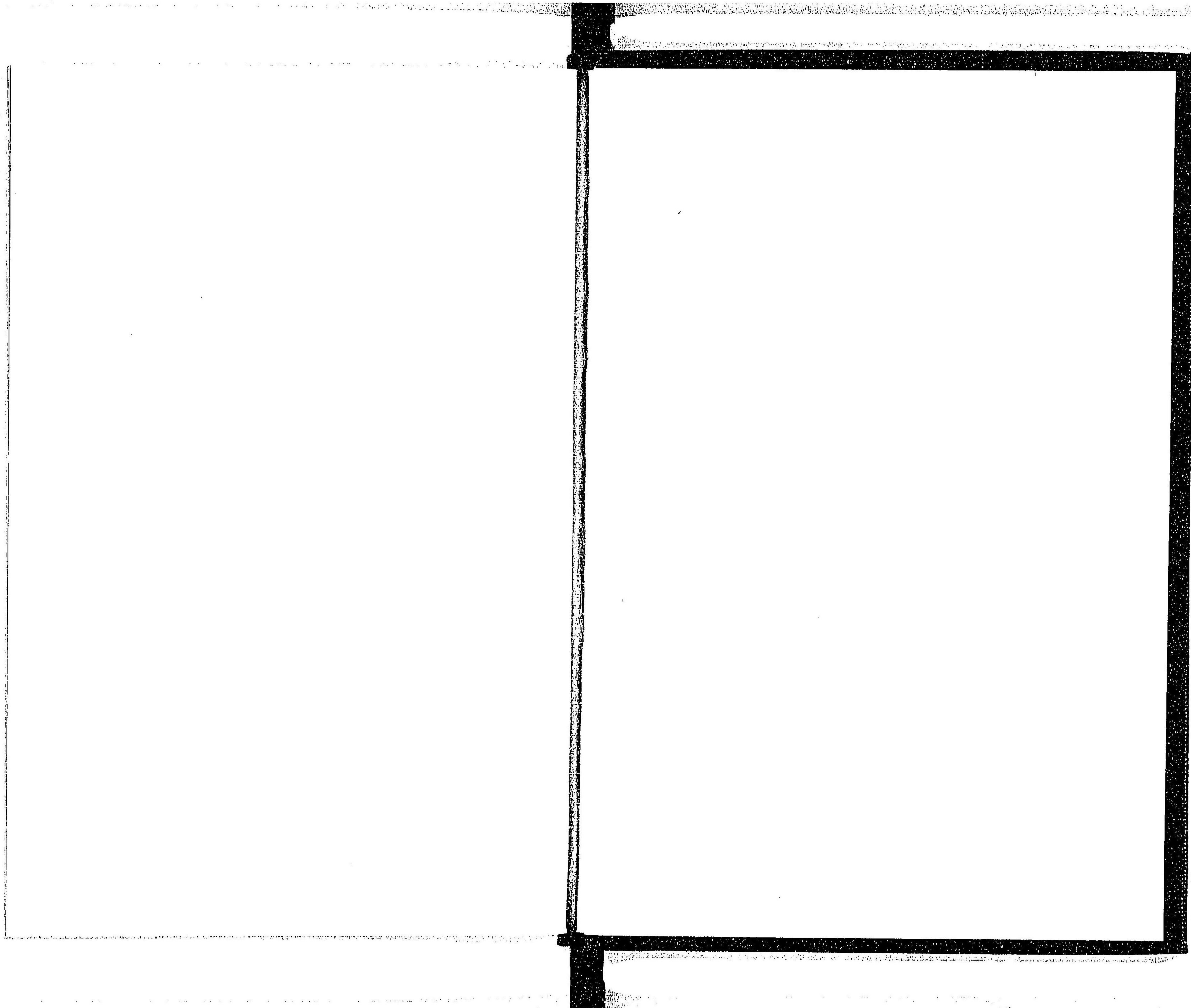
從明治九年八月至同十五年六月

相馬 幸治/編

M15-17

BBD-0420





チキ7a-61

